
東方 ~ 忘れられた少年 ~

八神凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 ～忘れられた少年～

【Nコード】

N4635L

【作者名】

八神凜

【あらすじ】

人里で忌み嫌われていた少年がいた。

少年はまだ幼いながら心に傷を負う。訳も分からず誰からも必要とされない…

ある日少年は崖から身を投げ出す決意をする。

しかし目が覚めるとそこは天国ではなく…？

忌み嫌われた少年（前書き）

八神凜です。

二作目となる東方projectの二次創作です。

初めての方もいるかもしれませんが…

第一作目、東方夢幻記も書かせて頂いてるのでそちらもお読みになつて頂けると嬉しいです。

まだどのように話を発展 させていくかわたくしにも分からないですw

最初の方しか頭に入っておらず後は思い付きで書いていきたくと思
います 苦笑では、

二作目、東方く忘れられた少年く

どうぞお読みになつてください。

忌み嫌われた少年

お前は疫病神だ

糞餓鬼近寄るな

目を合わせちゃだめって言うてるでしょ！

出ていけ

気持ち悪い…なんであんなのが…

人里である少年は泣いていた。誰からも好かれず、誰からも必要とされない
まるで生きている意味さえない
一言でいえばそうだった。

人々に忌み嫌われ
訳も分からず苦しむ。

この胸の痛みはなんだろう…
なんで皆僕のことを嫌うの？
なんで皆避けるの？

わからない…
でも僕はここにいちゃいけないんだ
きっと僕は産まれてきちゃいけなかつたんだ…
そうだ

いっそのこと死んでしまおう
生きている意味さえないのなら死んだ方がマシだ…

生きていても辛いだけ…
苦しむだけだから…

ここは人々が暮らす人里という場所。

僕はそこで生まれ、育った。

母親は僕を産んですぐ他界してしまった…

父親は僕のせいだと責め、まだ幼い僕には意味も分からずただひたすら愛情を求めた。

しかしある日、父親はそんな僕を置いて姿を消した。

今となっては生きているのか、死んでいるのかさえわからない…

父親が姿を眩ましてから早5年…

僕は今年で12才だ。

子供ながら分かることがひとつ。

僕が産まれてすぐ母親を殺してしまった。

そう、僕には普通の人間ではあり得ない特殊な能力の持ち主だった。

その能力とは…

『有無を操る能力』

呪われた能力だった。

僕は産まれて直後能力の暴走、

母親を殺し父親に憎まれ
そして人里の皆にも疫病神だと言われ嫌われていた。

そんな僕は今崖の上に立っている
ここはよく一人で遊びに来た場所。
何度死のうと思ったことか分からない…
でもその度いざ死のうと思ってても足がすくみどうしても崖から飛び
降りることが出来なかった。

まだ子供の僕にも『死』への恐怖が少なからずあった。

だがしかし、
今回は本気だ。

僕はここから飛び降りる。

迷いはない
自分で決めたことだから…
後悔もないし思い残すこともない。
この12年楽しかったことなど全くない
両親の愛情も全くなく
友達と言える者もいなかった。
そろそろ飛び降りよう。

崖にゆっくり歩み進む。

いつもならあまりの高さでいつも足がすくむのだが今回はそんなこ
とはない。

飛び降りる覚悟を決め、ゆっくり目を瞑りそのまま崖に身を投げ出
す。

その直後浮遊間が襲い掛かる。

ああこのまま僕は死ぬんだな

お母さん

今行きます…

そこで僕の意識は消えた。次目覚めた時は天国かな？ まあここよ

りマシならどこでもいいや…

忌み嫌われた少年（後書き）

如何だったでしょうか？

話が暗すぎて申し訳ないですが…

最初だけのはずなので…

一作目、そして二作目と交互に更新していきたいと思つたのでこれからもうごまごまよろしくお願ひします。

拾われた少年（前書き）

崖から身を投げ出したが気付くとそこは…？

グロテスクな部分が出てきます。

食事中、又は体調の悪い方は注意してください。

拾われた少年

「蒼空―？掃除終わったかしら？」

「もうちよつとでーす」

はい、そうです。

僕は只今掃除中です。

あ、ちなみに蒼空と呼ばれた少年というのは僕です。蒼い空と書いて”そら”と読みます。

そして僕を呼んだのは十六夜咲夜さん。ここの紅魔館のメイド長をしている綺麗系お姉さんです。

あ、ちなみに僕はここの執事長をさせて頂いています。

といつても執事が一人しかいないからだけど…

「ふう… やつと終わった。さて、これから…洗濯物と食事の準備…
か」

ちなみに僕がここに”来る”前は全ての仕事を咲夜さんが一人で行なっていた。

もちろん他にもメイドはいます。

数多くいる妖精メイド何ですけど…実際役にたってないんです…せいぜい自分の服の洗濯、そして食事程度しかしてません。なので実際メイドがいても仕事をするのは咲夜さん一人だけなんですよ。

今では僕も仕事を覚え、てきぱき咲夜さんのお手伝いをしています。

そういえばここに来て早3年…早いものですな。最初は色々戸惑いがあったり…仕事の量が多すぎて毎日へとへとになってたっけ…

そうあれは…

僕が崖から身を投げ出した時だった。

僕は身を投げ出した後、意識が途切れた。

そして僕はそのまま死ぬはずだった…

しかしどういうわけか目を覚ますとそこはふかふかした温かいふと

N……

じゃない…

何ですかこの”入れ物”は…

慌てて起き上がり”それ”を見る。

あらあら、これって棺桶じゃないですか。どこぞのバンパイアやら吸血鬼がお寝んねする寝処ですね。

え？なんでこんな子供がそんなことを知っているかって？

…そりゃあ1日家から出ることが少なかったので両親の残した本を片っ端から読み漁ったりしましたから。もちろん本で勉強したりしましたからそれなりに勉強も出来ます。

なんだか思い出したらリアル泣けてくる…

…って棺桶に寝かされてたっことは僕はやはり死んだっけってことかな…？

でもおかしいな。死んだら足が消えたり、空を飛べたりするんじゃないかっけ？

ってそんなことはどうでもいいんですよ…

問題は崖から落ちたはずなのに何で生きているかってことですよね…

うーん…うーん…

子供ながら考えてみる。

12歳で頭をフルで考えてみるとあることが思い浮かんだ。

「誰かに助けられた…?」

答えが見付かり、声に出すと返事が返ってきた。

「その通りよ。あなたを助けたのは私よ」

「ッ!?!」

いつの間にか部屋の中へ入っていた銀髪でメイドの服を着た綺麗なお姉さん。

だが見知らぬ人に戸惑いが隠せない…ましてや死ぬ覚悟をしてまで飛び降りたのに助けたとなれば当たり前っつていえば当たり前ですよ。ね。

「あ、あなたは…?そして何故僕を助けたのですか?」

「私はここのメイド長の十六夜咲夜よ。あなたを助けたのは私が一度あそこを通ったから。最初は事故で落ちたのかと思ったけど…違うみたいね。ところで名前は?」

「僕は神風蒼空です。咲夜さん…でよろしいですか？僕はあの時死のうと思っっていたんです…」

「呼び方は何でも構わないわ。私は蒼空と呼ぶわね。…で、蒼空は何で死のうと思ったのかしら？生きていれば辛いこと、楽しいこと沢山あると思うけど？」

少し考え、重い口を開く。

「…僕は産まれてすぐ自分の能力の暴走で母親を殺してしまっただです…そしてそのことで父親にも憎まれ、そして人里の皆にも意味嫌われていました。誰からも相手にされず、誰からも愛されませんでした…もちろん両親にも…僕は生きている意味がないんです…きっと生きている価値がないんですよね…」

言い終わると泣いていた。今までこんなことを聞いてくれる人さえ誰一人いなかった。誰も僕の話聞いてくれなかったから…でもそんな僕の話は今こうして聞いてくれる人がいる。なんだか気持ち少し和らいだ気がした……

そんな僕を優しく抱き締めてくれた…

ああきつと愛情ってこういうことなんだろうな…親が子を優しく包み込む。

出来れば両親からの愛情も感じてみたかったな…

「大丈夫よ。もうあなたは一人じゃない。これからは私”たち”がいるわ。…それともまだ死にたい？」

ジャラッ…

優しく抱き締められながら優しいことをかけてくれた後、一歩離れどこからか銀のナイフを取り出し構え出した…

「……………」

スツ…

「？」

テクテクテク…

ギイイイ

バタンツ…………

僕はそんな咲夜の行動に何も言わず棺桶へ戻り蓋を締める。そして中から一言だけ言った。

「…死にたくないです」

「ふふふ、じゃあこれからはここで働きなさい」

ギイイイ…

微妙に蓋を開けそこから本当に少しだけ顔を出し答える。

「…ここにいていいんですか？」

「いいわよ。じゃあ一緒にお嬢様に挨拶しに行くわよ」

…バタンッ

「…え？」

「知らない人…怖いですが…でも咲夜さんは良い人そうだから…好きです」

「困った子ね。大丈夫よこのお嬢様は（色々大変だけどね）」

それから僕は棺桶から出るのに1時間はかかりました。

え？何故かって？

…そのあと寝てしまったからです……

その間咲夜さんは何も言わず僕が起きるまでずっと傍にいてくれました。今思うと当初から咲夜さんは僕のお母さんのような存在だったのかもしれない……

そして僕が起きてから咲夜さんとお嬢様に挨拶しに行きました。そしてここに住ませて頂けるようにお願いをするとお嬢様は心良く僕を受け入れてくれました。しかし…見た目が僕とあまり変わらないような少女でちょっと気の強そうな女の子だったのが凄く印象的でした。僕どちらかというと気が強い子は苦手……

ああ棺桶の中へ逃げ込みたいです……あのフィット感、そしてあの狭さが何とも言えないんですよ。落ち着くんです。

あ、かなり余談ですがあれ以来寝るときは棺桶だったりもします。

まあそんなことは誰も聞いていないでしょうし、昔のこともだいた

い伝わったのではないのでしょうか？

ではもう少し説明を…

ここ『紅魔館』には主である吸血鬼のレミリア・スカーレットお嬢様。そしてその吸血鬼の妹様のフランドール・スカーレット様。あと門番である中国さん。確か名前は…何だっけ？いつも皆さんが中国と呼んでいるので忘れてしまいました…あ、そうそう紅美鈴さんでした。中国さんはいつも寝ていて門番としての仕事をサボっているので毎日のように咲夜さんにナイフをおでこにヒットさせられています。

日常過ぎて何も感じなくなりましたが、最初は焦りましたよねw あ、他にもまだいます。紅魔館の地下にある図書館、その中からあまり出ることのない魔法使いのパチュリー・ノーレッジさん。そしてその使いの小悪魔さん。あとは数多くの妖精メイドだけです。あとはよくパチュリーさんに会いに来る白黒魔法使いの霧雨魔理沙さんともよく顔を合わせたりします。

でも魔理沙さんは物をよく壊しますし、散らかして行くので正直迷惑だったりもします。

でも魔理沙さんはよく話し掛けてくれます。魔理沙さんはかなり話しやすく親しみやすい方です。僕の中では良い人？ですね。

あとは幻想郷の自称楽園の素敵な巫女さんの博麗霊夢さん。

この方はさっぱりした性格でして、力のある方…主に人間ではない方に好かれています。(妖怪とか…) そんな霊夢さんも一緒にいると気が楽になります。よく隠していることを勘づかれますが…

まあだいたいこんなところでしょうか？

お話をしている間に仕事がほとんど終わってしまいました。

あ、そうだ。

ついでにというか最後にですね。

僕の能力の紹介をしたいと思います。

僕の能力…

『有無を操る能力』

は、正直チートだったりもします。

物をいきなり出したり、消したり…どこぞの四元ケツトだつてよく突っ込まれてしまいます…うう

他には寿命を永遠に止めたり、

力…つまり霊力、魔力、妖力、神力…まあそんなところですかね？
これらを使うことだつて可能ですし、幻想郷の方々の能力をその気になれば使うことだつて出来ちゃいます。

でもあまり能力は使いませんね。

この能力はあまり好きではないんで…主に過去のことです……

まあ僕についてあとは…

あ、軽く自己紹介（遅いですが…）でもしましょうか。

僕の名前は神風蒼空かみかぜそらです。

歳は今年で15歳です。

能力は先ほども言いましたが『有無を操る能力』です。

まあこの程度で自己紹介は終わりましたでしょうか。

ええ、

このあとは……

妹様の食事ですか……

毎度ながら”これ”はなれませんか……

誰が拐つて来たのか分からないですが……”人間”を殺して調理するんですよ……

といつてもその役は僕ではなく咲夜さんですけど……初めて見た時は何度リバーズしたことやら……ああ思い出しただけでも吐き気が……
……うえ……

で、僕の仕事は調理された”人間だった”物を妹様にお持ちすることです。

独特の匂いだったり、生き血スエッを見るのは今でも苦手です……

一応僕も人間ですので……

あ、もう料理出来てる……

今日はどうやら20代の女の方の……胸の煮込みと生き血らしいです……

これだけは本当嫌です……リアルゲボリそうです。

あ、食事中の方は申し訳ございません……

不愉快なお話をしてしまいましたね……

ではさつさと”これ”を妹様に運んでしまいたいと思います。

「フランドール様ー？食事ををお持ちしました」

「……蒼空？入っていいよ」

ギィ……

重たいドアを力いっぱい入れ開ける。

中は毎度のことながらあちこち”壊れている”。
妹様は情緒不安定でしてよく暴走を繰り返しています。僕も何度殺されたことか…でも妹様は憎めないんです。僕も一人だったので…
そんな妹様を放っておけずレミリアお嬢様に禁止されていますがよく会いに来てはお話をしたり、少しだけ遊んだりもします。（主に弾幕ごっこですが…）

「フランドール様、食事はどうしM「蒼空」！会いたかったよー。
今日は何して遊ぶ？弾幕ごっこ？」

…最近では入って直後妹様に抱き着かれます。
初めの頃はよく避けられたりもしましたが今ではお互い打ち解け合
いかなり仲が良くなりました。

「すみません…まだ仕事が残っていますのでそれが終わり次第また
遊びに来ますね」

「むー…まあ仕方ないか。じゃあまた後でね」

「はい。あ、ちゃんと食べてくださいね？じゃないと遊びませんか
らね」

「わかってるよー」

妹様の部屋を出て他の仕事を早く終わらせるべく廊下を走る。あ、
訂正。走るのではなく飛んでいます。廊下には妖精メイドが沢山い
るので危ないんですよ。
なので急いでいるときは飛んで行きます。まあもちろん妖精メイド

も飛んだりもしますが…

残りの仕事を素早く終わらせ、咲夜さんに報告。

すると今日はもう上がっていいとのことだったので急いで妹様の部屋へと向かう…

拾われた少年（後書き）

やっと更新しました。

毎朝バスの中で書くのは辛い…orz

今回は愛情というテーマで多少書いてみたのですが…どうだったでしょうか？

今まで感じたことのない愛情というもの…

蒼空にとって切なくも嬉しくもなるものになりましたね。

何故紅魔館かというところは何となくですかね？

一番書きやすかったので…w

あ、それと

棺桶のネタが何気気に入ってしまったのでこれからネタとして何度か出していききたいと思いますw

お読みになって頂いた方はありがとうございます。

これからも更新頑張りたいと思いますのでどうぞよろしくお願いたします（――）

弾幕ごっこ(前書き)

フランドールとの弾幕戦です。
初めての戦闘シーンです。

仕事が一段楽し、妹様のところへ急ぐ蒼空。
予想では弾幕ごっこなんだろうなあ……はあ……

果たして蒼空の実力は…？

弾幕ごっこ

仕事が一段落したので
妹様と遊ぶために今向かっています。

え？

弾幕ごっこをするのかって？

…多分そうなりますね。

あの妹様相手に死なない僕が不思議ですか？

それは僕の”分身”に妹様の弾幕を食らわせたり、弾幕を消したり
してますから大丈夫ですよ。

あと余談ですが部屋が壊れたら能力（弾幕ごっこの際は使用します）
ですぐ直しますし、外に音が漏れないように一工夫もしています。

…バレたらやばいですからね 汗

「フランドール様、入りますよー？」

「いいよー」

ギィ…

ボタン……

ああ…毎度このドアは重たすぎです…

能力で力を強化してなければ開けられないんですよね。

「遊びに来ましたよ。」

今日は何をs「弾幕ごっこ」「…ですよね」「

いつも通り弾幕ごっこですよ。

死なないようにかなり神経を削りながら妹様の相手をしなくてはならないんですが…これがまた大変で……

「じゃあそろそろ始めるよ」

「はい」

かなり嬉しそうだ。

妹様は僕が来てから情緒不安定も少しずつだけど良くなり、暴走も少なくなった。

今ではたまに紅魔館内を出歩くようになったくらいですから良かったと言えるでしょう。

「早めに壊れないでね？ スペルカード 『禁忌 クランベリートラップ』」

妹様のスペルカード、

『禁忌 クランベリートラップ』

とはクランベリーを収穫する様子を表している弾幕です。ちなみに何度も見ているので能力なしでも避けることが可能だったりします。

「それはもう効きませんよ」

全ての弾幕をかわし終わると次の弾幕が放たれた。

「さすがだね。でも次はそうはいかないよ？ 『禁弾 スターボウブレイク』」

スペルカードを唱えた直後、僕の頭上に上側が赤で下側が紫な虹色の弾幕が出現し、パンと弾ける音と共に降ってきた。これも頑張れば避けることが出来るんですが…

当たったら楽に死ねますね。気付いたらお母さんが手を振ってるーだなんてことにはなりたくないですからね。

さすがに死ぬのは嫌なので…能力を使わせて頂きます。

能力で魔力を大幅に上げ、頭上に魔力のバリアを出現させる。

しかし妹様のスペルカードはかなり強力で何度撃ち破られたことか…なので今回も改良版を使わせて頂きます。

魔力だけでなく、霊力、妖力を混合させ、二重層で一層目が破壊されたら二層目の下に新たにバリアを張るといふ何とも僕ながら凝ったバリアである。

そのままバリアに弾幕が当たり妹様の弾幕は消滅していくけど…

シユン…

やはり一層目が破壊されてしまった。瞬時に二層目の下に復元させ弾幕が全て消えるのを待つ。

数秒後弾幕は全て消え去った。

…ふう

いくらバリアの下にいたりはいえ怖いものは怖いんですよ…

一度喰らったことがあるんですけど、

あの時の激痛は忘れられませんね…

ああなんだか僕の人生良からぬことばかりですよ本当…

「反撃しないの？今度は絶対に私が勝つからね！」

「ではそろそろ反撃させて頂きます。あ、それと僕は負ける気は一切ないですよ？」

実はあの悪魔の妹に僕は負けたことがないんです。

まあ能力的に負けるわけがないんですがね…

かなりチートですもん。自分で言うのも何だけど…うふふ

妹様に多数の弾幕を放つ。もちろんこれで勝負が着くわけがないんですけどね。

「そんなの効かないよ。今度こそ決めるよ！」『禁忌 レーヴァテイ
ン』

ポツポツポツ

ジャキンッ!!

炎の剣が出現し、
そして僕に向かって振り回してきた。

ズガガガガッ!!

僕がいた場所は崩れ落ち、破壊されてしまった。

もちろん剣の軌道は読みやすいので避けるのは容易いです。

…さて、そろそろおしまいにしますか。

妹様に右手を向ける。

「うーちよこまかとー！次は絶対当て…ッ!？」

ポロツ…

炎の剣が地面に落ちるそれと同時にそれに左手を向けて消し去る。

「これで終わりですね。今回も僕の勝ちですよね」

フランを見ると両手両足が消し飛んでいた。

周囲におびただしい大量の血が飛び散る。吸血鬼といえはこのままでは死ぬだろう。今妹様は所謂達磨状態になっている。まあ僕がそうしたんですけどね。

「う…キヤアアア、ア」

激痛がフランを襲う。

吸血鬼はすぐ再生してしまうので再生能力を”無”にしたわけです。妹様の体は再生しないので今もがき苦しんでいるわけですが…このままではあまりにも可哀想なので痛みを消し、何もなかったことにする。

「ッ!？」

「さ、妹様。今日はこの辺で終わりにしましょう。僕はこれから飯を食べて寝ますね」

「…また負けちゃった。でも楽しかったよ。蒼空ありがとう」

「いえいえ。ではまた遊びに来ますね」

部屋を元通りにしてから、妹様に別れを告げ部屋を後にして、僕はそのまま食卓へと向かうことにしました。

ギィ…

ボタン

「ふう…さすがに疲れましたね…」

仕事の後に弾幕ごっこはなかなかハードですね。ましてや吸血鬼が相手だなんて…命がいくらあっても足りないような気がします…

…さて、ご飯を食べて寝ますか。明日も仕事がありますし、早めに寝なくては。

食卓に行くとミネストローネがおいてあった。どうやら咲夜さんが作っておいてくれたみたいです。

あ、そういうや咲夜さんには妹様とのことを話しました。最初は心配していましたが能力が能力なので…

まあ最初は死にかけたりも何度かありましたが…汗
さて、余談はさておき冷める前に頂くとしましょう。
ミネストローネを一口啜る。

ズズ…

相変わらず美味しいです。

咲夜さんは本当に料理もお上手で…本当尊敬に値します。そんな咲夜さんの負担を僕は減らしてあげたいと思っと思っています、あの時の恩もあります…あの時助けていただけなければ今の僕はなかったし、こんな充実した日々を過ごすことも出来なかったわけですから。本当に咲夜さんには感謝ですね。

ミネストローネを食べ終え、自分の部屋へと戻る。

すぐにパジャマに着替え…棺桶の中へ入り蓋を閉める。
グイグイ

ボタン

ああ落ち着く…

やはりこのフィット感やべえですよーえへへー
本当幸せです…

棺桶っていいなあーこのままずっと入っててもいいくらいですし。
まあ咲夜さんには変と言われてしまいました…

さて今日も疲れましたし明日に備えて寝るとしますか…
お休みなさい。

少年就寝…

弾幕ごっこ（後書き）

如何だったでしょうか？

まだ3話と短いながら自分なりに奥深く書いてるつもりです。

当初の蒼空は生きることさえ投げ出していた。

しかし紅魔館へ来て少しずつ心境が変わっていきます。

生きることへの喜び、

そして生きていることで楽しいこと、辛いこと、悲しいこと、沢山
経験していく蒼空の成長をお楽しみ頂ければ幸いです。

まだまだ蒼空の”隠された”あることがあります。

それまで一作目と交互にお読みになりながらお待ち頂けると助か
ります。

作品についての皆様の感想をお待ちしております。

もっと良い作品に出来るよう努めますのでどうか感想、指摘をお願
い致します（――）

大図書館（前書き）

ほのぼの系になりつつあります。

大図書館

まだ意識が夢にある中、現実から誰かの呼ぶ声が聞こえてくる。

「ら…そ…ら…そら」

そらあ？

そらって何ですかー？

おいしいのぉー？うへへ

「早く起きなさい蒼空ー！！」

「ふえ！？…あれ？おかあ…さん？」

「え？」

「…おかあさん」

直ぐ様飛び起き、目の前の少女にそのまま抱き着いた。

（温かい…お母さんの温もりだあ…）

しかし少年は気付いてなかった。抱き着いた少女は母親ではないこと…

蒼空は自分のしてしまった過ちを悔やんでいた。自分のせいでお母さんが死んでしまったこと。

いつも自分を責めていた。そのためかよくある夢を見てしまう。

それは自分が望む夢。幸せに暮らす蒼空とその母親。蒼空は特別な幸せを望んでいたわけではない。ただ平凡な幸せを望んでいた。しかしそれすら叶わない……

蒼空は抱き着いた少女の顔を覗き込む。

「……咲……夜……さん？」

抱き着いた少女は咲夜だった。

蒼空はいつもあの夢を見るとなかなか起きない。そのため咲夜が起こしに来るのだが……こういったことが今までにも数多くあった。

咲夜の表情はとても悲しい……そして辛そうにも思えた。

「……蒼空。朝よ。早く起きて顔を洗ってきなさい」

「え……あ、す、すみません……ぼ、僕あの……」

「構わないわ。私はあなたの実の母親ではないけど、育ての親なんだからいつでも甘えてきなさい」

「……か、顔洗ってきます……」

物凄く顔を赤くして部屋を出ていった蒼空。

そんな蒼空の後ろ姿を目で追いながらクスクスと笑って見せた咲夜。しかしどこか悲しそうである。

「…お嬢様。いつまで蒼空に”あの事”を黙っているつもりですか？」

「まだその時じゃない…咲夜。お前の気持ちも分かるけど今はまだ言えない」

蒼空を起こしに行った後、私は蒼空のことが心配になりお嬢様の処へ来た。

実はあの子には隠された秘密があり、そのことをまだあの子に言っていない。お嬢様はまだその時ではないと言っけど見てるこっちが辛いわ…

見兼ねた咲夜がいつもレミリアに相談する。しかし答えはいつも決まって一緒。

早くあの子に真実を伝えないと…

「ふう…また恥ずかしいことをしちゃったなあ……………」

洗顔をしながらあの時の事を繊細に思い出す
カアアアツノノノ
またも真っ赤になってしまっ。

「…さ、さて今日も仕事頑張ろうっと」

…何とも下手な誤魔化し方である。

まあ子供だから仕方がないといえば仕方がない。

部屋に戻り、

棺桶の中を綺麗に整え、そして執事の制服に着替える。

まずは屋敷内の掃除：と。ここ紅魔館はかなり広い。そのため一人でやるとなると1日かかってしまう。咲夜さんは時間を止めているためすぐ終わらすことが出来るが、それでもこの広さを一人で掃除するのは骨が折れてしまう。

そのため一部分だけど、僕もお手伝いをしている。

今日は……大図書館か。

あそこはかなり広いし、一人でやるのはきついなあ。

でもこあさんが手伝ってくれるからまだ楽かな？

あ、ちなみにこあさんってのは小悪魔さんのことです。

掃除道具を持ち、

大図書館の前に立ち一言声をかける。

「パチュリーさん？蒼空です。掃除しに来ましたー」

…

返事がないや。

まあいつものことだけどね（苦笑）

ギィ

ガタン…

扉をきちんと閉め、

大図書館の中部へと向かう。するとそこに白黒の魔法使いさんがパチユリーさんと本を読んでいた。

「あ、魔理沙さんもいらしたのですか。紅茶…はありますね」

「ん？蒼空か。お邪魔してるぜ」

「また不法侵入ですか？レミリアお嬢様に怒られますよ？」

笑いながら話すと魔理沙さんもいつもの事だと笑って見せた。

「ではごゆっくりしてってください。あ、これから掃除しますので散らかさないでくださいね？」

「わかってるぜ」

…本当ですかね？

いつも散らかして帰るし、本は盗んでいくしでこっちは色々大変なんですよ。

「パチユリーさん、こあさんはいないんですか？」

するとパチユリーは何も言わず図書館の奥の方を指差す。
また本の整理でもしているみたいですね。

「ありがとうございます。では失礼します」

一礼し、その場を離れる。指差された方向へ足を運ぶところあさんが本の整理をしていた。

「こあさん。お掃除しますのでまた手伝ってもらえませんか？」

「すみません。今手が離せなくて…終わり次第手伝いますよ」

「いつもすみません。ありがとうございます」

…今日は一人か。

仕方ない。いつも手伝ってもらっては迷惑だし、今日くらいは一人でやりますか。

持ってきた筈で図書館を隈無く掃き掃除をする。

そのあとモップで掃き取れなかったゴミを一掃する。

これが終わると次は本棚の水拭き。そして本の整理だ。

…約3時間休むことなく掃除をするとやっと終わった。途中こあさんも手伝ってくれたため早く終わることが出来た。

「やっと終わった…こあさんありがとうございます」

「いえいえ。このくらい構いませんよ。蒼空くんもいつも御苦労様です」

こあさんは優しいです。気遣いが出来て、僕のお姉さんの存在です。

僕はそんなこあさんも含め紅魔館にいる皆好きです。ここに来れてほんとに良かったと思いました。

雑談はこの程度にして次の仕事とつと…

次は洗濯か。

妖精メイドは自分のはやっていますから洗濯の量がそんなにない分楽ですね。

でも僕以外女の方なので…その…下着がちよつと…苦手ですね。

どうしたら良いのか分からないですし……に、匂いとか掻いたことなんてないですからね？汗僕がそんなこと出来ると思いますか!?

……なんか今出来るだろ的な感じで思った方が居そうで怖いですね

…

本当にしてないですからね!?

多分…

「で、では僕はこれで。失礼しました」

ギィイ

ガタン

扉を閉め、

洗濯をしに向かう。

廊下を歩いていると目の前にいきなり咲夜さんが現れた。

「さ、咲夜さん！？僕決して匂いとか嗅ごうとかそんなこと思っていないですから！だからあの…その…ゴニョゴニョ」

「？何を言ってるの？そんなことより蒼空、これからお使いに行ってくれない？他の仕事は私がやっておくから」

「え？あ…いえ…何でもないです…／＼で、どこに行けばいいんですか？」

「白玉楼よ。これを渡して来てもらいたい」

はいと渡された物はどうやらお酒のようです。

多分白玉楼の亡霊姫、西行寺幽々子さんにだと思えますが…彼女はかなり暴飲暴食を繰り返すある意味化物なんですよ…
食べている姿しか見掛けないですし（苦笑）

「分かりました。では行ってきますね」

「連絡は着いているわ。あとは気を付けて行きなさい」

「大丈夫ですよー」咲夜さんに手を振りながら飛ぶ。ちなみに幻想郷には電話があります。たしか…河城にとりさんという河童が作ったとか。何でも河童は文明が進んでいて機械に詳しいらしいです。でも電話が幻想郷各地に設置されたのは僕が産まれた頃らしいですけど…

まあ便利なことに越した事はないですからね。

紅魔館の屋敷を出て、門番の中国さんに挨拶をする。

「中国さん…ってまだ寝てますね」

「…うへへ…咲夜さん駄目ですってば…」

…一体どんな夢を見てるんですかあなたは…！

何か起こすのも申し訳ないからこのまま行くとしますか。

紅魔館を後にし、白玉楼へと向かう。

大図書館（後書き）

こんな感じで良いのか自分でもよくわかんなくなってきました（苦笑
とりあえず次回は戦闘シーンでも書こうかと思えます。

妖精（前書き）

白玉楼へお使いに行く蒼空。しかしその途中で絡まれてしまう。
邪魔をされてしまった蒼空はお仕置きをすることにした。
その相手とは…？

妖精

紅魔館を出て、地図を頼りに白玉楼に向かった僕は今…

「あたいつたら最強ね！」

…何なんでしょうこの状況。説明しますと長くなってしまいましたが…いきなり氷の妖精が勝負を挑んできました。

はあ…

(え？説明終わり！？)

はい。説明は終わりですが…あなたは誰ですか？

(随分とまあ短い説明だったね…あ、ぼっくんはこの小説の作者だよ。一応八神凜って名前なんだけど…知らない？)

全然…

(…orz)

と、まあ作者は放っておいて、今氷の妖精に絡まれています。急がなくては行けないというのに…正直邪魔ですね。

「僕忙しいんですけど…」

「あたいとしょーぶだあー！」

「お使い頼まれので無理です」

「あたいは強いよー」

「あの…僕の話聞いてます？」

「あたいの弾幕避けれるかー？」

…だーめだこりゃ。話になってませんね。少しお仕置が必要ですかね？氷の妖精なら…これなんかどうですかね？うふふ

「え？」

氷の妖精…？さんの周りに灼熱の炎を出現させ、周囲の気温を上昇させる。氷の妖精だから溶けたりするのかな？

「あ、あづ…い………」

お、おお…ほんとに溶けるなんて…妖精でも溶けるものなんです。これはなかなか面白いものを見せてもらいました。ってか、ほんと暑いですね。僕まで溶けてしまいそうです…
おや？此方に誰か向かってきますね。気配がする方に視線を向けると物凄い勢いで此方に飛んでくる妖精がいた。

「チルノちゃん!!!」

溶け出している？…チルノと呼ばれた氷の妖精がいる灼熱の炎に突っ込もうとする緑髪の妖精。他の妖精より強そうだから…大妖精とでも言っておきましょうか。

自分の見も省みず灼熱の炎の中に入ろうとする大妖精を引き止める。

「危ないですよ」

「離して！！チルノちゃんを助けないと」

引き止める手を払い、灼熱の炎に突っ込もうとする大妖精。

ここまで友達思いなのは凄いですね。僕には友達というものがいなかったのでもうここまですること自体よく分かりません…けど、紅魔館の人たちが困っていたら助けたいという気持ちと同じことなんですよ。助けたいという気持ちには変わらないんですかね…

そんな大妖精の気持ちに負けチルノさんを許すことにした。

「大丈夫ですよ。ほら」

「え？…さ、寒い…？」

灼熱の炎は消え、代わりに巨大な氷を周囲に4つほど出現させる。ちなみに気温も元通りにしてあるため一気に気温が下がる。まああの灼熱の炎の後なら誰だって寒いって思いますね。

「チルノちゃん！！」

溶けかけていたチルノの傍に駆け寄り心配そうな顔をしている大妖精。

「あの…ありがとうございます」

「いえ、元はと言えば僕が灼熱の炎を出したので…逆に申し訳ありません」

「チルノちゃんに無理矢理勝負を挑まれたんですよね？いつもこの子はそう何ですよ…迷惑をかけてすいません」

「いえいえ。あなたに謝罪を言われることでもないですし気にしないでください。では今は寝ているチルノって子を頼みます。僕はお使いに行かなくては行けないので…」

「はい。あ、あなたの名前は？」

「僕は蒼空です。あなたは？」

「私は大妖精です。蒼空さん本当にありがとうございました」

大妖精か…僕の勘もなかなかのもですね。大妖精さんはチルノさんを妹のように慕っているんですね。

僕にも兄弟がいたらなあ…でも僕には姉（育ての親）の咲夜さんもあるし、寂しくはないですけどね。

「いえいえ。ではまた会いましょう大妖精さん」

「はい。では気を付けて（…あれ？チルノちゃんの傷もなくなってる？それに私の体力もここまで来るのに飛ばしてきたのに回復してるし…あの子は一体…」

大妖精とチルノと別れて数分、白玉楼へと向かったのだけど…また絡まれてしまった…しかも今度は鬼ですか…厄介ですね。

「さっきの戦い見てたよー。あたしは萃香っていうんだ。よろしく」

見た目は幼女です。幼女なのに酒を飲んでいきます。まあ鬼は吞兵衛と言いますし、多分かなり長く生きていると思います。その姿で酒を飲むのはかなり抵抗あるんですけど…

「…僕は蒼空です。僕に何か用ですか？」

「そんな構えなくていいよー。別に戦おうってわけじゃないんからさ。暇だったから見学させてもらっていたんだ」

グビグビ

…お酒飲むの止めてもらえないですかね？反応に困るんですけど…

「そうですね。では僕はお使いがあるのでまた今度「行っちゃおうー？連れないなあー」…あの僕お使い…」

「お使いなんて後で良いじゃん」

笑いながら手を上下に振る萃香さん…酔っぱらいの相手ってなんだかめんどろいですね…

「すみませんが僕は先を急ぐのでまた今度ってことでお願いします」

「ん〜良い暇潰しになると思ってたんだけどなあ〜」
…暇潰しって。

鬼は最強の分類に入るし、さすがに相手にはしたくないですね…萃香さんは悪い鬼ではなさそうですね、今はお使いが最優先ですからね。何とかこの場を凌がないと…

「で、では僕はお使いに行ってきますね」

「うん、気を付けてね」

…あ、あるえ？

案外素直に行かせてくれましたね。何だか気が抜けます…苦笑

「では僕はこれで…」

「うん。じゃあまて」あやややや、萃香さんじゃないですか。…と、あなたは確か紅魔館の執事長ですよね？」…文久しぶりー」

…何でこう…次から次へと現れるんですかね…。僕ってやっぱり災難？疫病神？ああなんだか泣けてくるorz

「…何か私悪いことしましたかね？」

「何もしてないんじゃない？あはは」

疾風の如く現れた少女が悪いわけではないですけど早くお使いに行きたいんですよ…仕事も残ってますし。

「…はあ（とりあえず逃げてもいいですかね？）…文さん…でいいですか？僕お使いがあるので行きますね」

「え？ちよ…待ってくださいよ！取っ「お断りします」…そんなこと言わずに」。お願いしますよ。あなたのおk「文！」「…あ、すいません。何でもないです」

お、思わず口が滑りそうになってしまいましたね…汗
萃香さんナイスです。助かりました。

へらへらと笑っていた萃香が急に怒鳴ったことに多少驚きましたが、何より何か僕に隠し事があるのかと思わせるような反応でしたね。一体何だろう…

「?まあいいですけど…」

「じゃあ私もそろそろ帰るとするよ。じゃあまたねえ」

一瞬にして消え去る萃香。

「あやややや。じゃあ私もネタを探しに行ってきますよ。では…」

「あの…」

「?何ですか?」

「先ほどは何を言いかけたんですか?何か僕に隠し事をしているように感じたけど…」

「い、いやあ…何でもないですよ。あはは」

…嘘が下手ですね。子供の僕にも何か隠し事をしているってことはわかりますって…

気になりますが、

これ以上は言ってもらえそうにないですね。

「そうですね。では僕もお使いがありますので。文さんもお気を付けて」

「はい。ではまた（あ、危なかったですね…多分隠し事をしている
つてことはバレちゃいましたか。そろそろあの子にも言わなくては
いけない頃なのですかね？）」

萃香さん、文さんと別れた後は誰にも会うことなく、白玉楼へ無事
に辿り着くことが出来た。

早くお使いを終わらせて紅魔館へ帰らなくては…

妖精（後書き）

蒼空の秘密。

そしてあの子とは…

まだまだ始まったばかりの物語が少しずつ解き明かされていきます。

白玉楼（前書き）

白玉楼へ辿り着くとそこには綺麗な桜があった。

その中で一番大きな桜の木だけ何故か咲いてなかったのだった…

白玉楼

白玉楼へ無事辿り着いたのは良いけど…門番らしき人が見当たらないんですけど…勝手に入ってはいけないですよ。さて…困りましたね。

………

と、とりあえず声をかけて入れれば不法侵入にはなりませんよね？

「すいませーん。紅魔館の執事長の蒼空と申します。お使いを頼まれたので来ました。何方もいないようなので…失礼します」

門は開きっぱなしで、そのまま潜り抜ける。

しかし紅魔館並に何とも無警戒な所ですね…紅魔館は門番がいるのですが中国さんは寝てますし…ん？

「…綺麗ですねぇ」

思わず目を奪われる。桜の木が満開に咲いていた。

あれ？でも今桜の咲く季節じゃないような…まあ綺麗だし細かいことは気にしないで起きましよう。

こんなに綺麗な桜あまり見れませんね。もう少し見ていくとしまし
よう。

お使いを忘れ桜に夢中になる蒼空。

よく見ると1本1本が個性が出ている。桜といっても人間同様同じではない。桜も個性があり、咲き方、木の形、そしてその桜の木の
雰囲気が違う。

桜の木を見て回っていると知らず知らず奥まで来てしまったようだ。

「おや？どうやら夢中になりすぎて奥まで来てしまったみたいですね…あれ？この木だけ咲いてないですね」

他の桜の木よりも一回りも二回りも大きく、立派な桜の木。

これが咲いたらどのくらい美しいんだろう。見る者全てを安易に虜にするといっても過言ではないだろう。

しかし何故咲かないのだろうか。

「？何だろう…この違和感は……」

異常なまでの違和感。自然と桜に吸い寄せられる。まるでこっちに
来いと言わんばかりに…

無意識に吸い寄せられ、桜まであと数メートルとなった時、後方から突然女性の声が聞こえた。

「あまり近づいてはいけないわ」

この一言で我に返る。

「え…今のは…？」

「その桜の木は西行妖。とある歌聖だった者が自分の能力に嫌気を差し、ある日その桜の木が満開の時に自害したのよ。それからというもの更に立派に咲き誇るようになったこの桜は自殺願者を吸い寄せるかのように導きやがて妖力を持った。その木は死に導く妖怪桜となったの。人間の精気を奪ってしまう危険な桜よ。きつとあなたも何度か自害を考えたことがあったみたいだから吸い寄せられたのね」

「なるほど…あれ？何で僕が自害しようとしていたことを知っているんですか？そしてあなたは…？」

「あなたのことは何でも知っているわよ。私はスキマ妖怪の八雲紫。よろしくね蒼空」

「（…何だか胡散臭い妖怪ですね）名前まで分かるだなんて…こちらこそ宜しくお願いします。あ、ところで幽々子様？はいらっしゃいますか？」

「（今何か思ってたわねこの子…いつそのことスキマツアーにご案内しちゃおうかしら…うふふ）幽々子なら多分中にいると思うわ。じゃあ私は帰って寝るわ」

「（…な、なんか悪寒が…）え？あ、はい。助けて頂きありがとうございます。ごさいました」

スキマ妖怪の紫はスキマを開きその中へと消える。

熊さん宜しく発言を残し消え去る彼女を見送った後、屋敷内へと足を運ぶ。

しかしあの桜は危険でしたね…まさか死に導かれるとは…そういえば自害も考えていた時もありましたね。

お母さんは一体どんな方だったのでしょうか…そういえば一度人里で慧音さんに聞いたことがありましたね。詳しくは教えてくれませんでしたがとても偉大で幻想郷に欠かせない人だったとか。しかし僕が産まれる前に病気を患ってしまったらしいのですが…

昔のことを考え、多少落ち込んでいた時だった。屋敷の一步手前で何とも緩い感じの女性が話し掛けてきた。

「あら？蒼空くんじゃない。白玉楼へ遊びに来たのかしら？」

見た目本当緩いです。なんかほわほわしてます。ポーツとしてるイメージが何とも似合う人です。

しかし何でこう…皆さん僕の名前を知っているんでしょうか？

「こんにちは。残念ながら遊びではなく、紅魔館からお使いを頼まれてきました。幽々子さんはいらっしゃいますか？」

「幽々子は私よ」

…え？このほわほわした女性が白玉楼の主！？ま、まあ紅魔館でも見た目は僕より幼い女の子が主だし…おかしくはないですね。

「あなたが幽々子さんでしたか。お気付きになれず申し訳ございませぬ。ではお使いの品をお渡ししますね」

預かってきた物を受け渡す。中身は酒だけだな！！w

(…またあなたですか)

(よ！蒼空くん。ぼっくんの名前は覚えてくれたかな？)

(八神凜さんで作者さんでしたよね)

(おおーさすがだねえ。ご褒美にひとつ教えてあげよう…ふふふ)

(…何ですか？)

(「そんな目しないでくれよー。蒼空くんにメリット豊富な事だよー?」)

(「…では教えてください」)

(蒼空くんは再びここに来ることになるだろう。そしてまずは紅魔館へ戻ったら咲夜、そしてレミリアに話を聞くんだな。君が一番気になっていることを…そのあとは人里へ行くと良い。そこで全てがわかるだろう…じゃあぼっくんは消えるわ!昨日運動したら筋肉痛なんでな…泣)

(「え?ちょ…待って…」)

そのまま消える作者…

おまいは一体何!?

的な感じで思っただ方はNiceです。ご褒美にスキマツリ

(八神さんが言っていたことはかなり気になりますね…僕の知りた
いこと…多分明らかになりますかね…ん?)

自分の世界へと入っていると幽々子の声が聞こえてくる。

「蒼空くん?もしもーし?」

「え?あ、すみません…自分の世界に入っていました…」

「そう…まあいいわ。じゃあ確かにお酒は頂いたわ じゃあ」また
”ねえ”

「はい。ではまた」

どうやら幽々子さんも何かしら…いや全てを知っているみたいですね。それにスキマ妖怪の紫さんまで…一体どういうこと何でしょうか。

幽々子と別れ白玉楼を出ようと出口へ向かうと
先程はいなかった門番らしき女の子がいた。

「ッ！？侵入者！？」

「…え？」

此方の姿を確認すると直ぐ様斬り付けてきた。

しかし妹様に比べればまだまだですね。このくらいでは能力を使う必要もなく回避出来ます。

難なく避けると次の攻撃が仕掛けられるはずだったのだが…

「あれ？え？」

「すみません。とりあえずお話を聞いてもらいたいのであなたの剣を消させて頂きました。あ、すぐ戻しますからお話を聞いてください」

「（…負けた）お話とは何でしょう？」

「僕は紅魔館の執事の蒼空と申します。白玉楼へお使いに来たのですが門番がいなかったので申し訳ありませんが一声お掛けして中へ入らせて頂きました。なので侵入者ではありませんので攻撃しない

「でください」

「そうでしたか。ごめんなさい。それにしてもあなたがあの…「妖夢」？」あ…すいません。主人が呼んでいるようなので私はこれで失礼します」

「はい。では僕も帰ります」

剣を戻し、そのまま白玉楼を後にする。

余談だが、妖夢は幽々子にこっぴどく怒られたらしい。まあ怒られたといってもそこまではないだろうが…

白玉楼（後書き）

久々の更新です。

なんか疲れましたよ…

更新何とか頑張っしていきたいと思います。

先読み出来ている方もいるのではないのでしょうか？
多分そうですw

隠された真実（前書き）

不幸な少年蒼空は無事紅魔館へ辿り着けるのだろうか…

隠された真実

白玉楼を無事？出た後、紅魔館へ帰宅するべく今帰っています。しかしまたもや絡まれるという悲惨な事に…

そして今回の相手は……

またもや天狗です。

さて、何故こうなってしまったかというところ…

白玉楼を出て快適に飛んで帰っていたら後方から突然タツクルを喰らったというわけですよ。かなり痛かったです…ピチューン

「イタタ…君大丈夫！？つい居眠りしていたらぶつかっちゃってさあ…あはは」

はい。

見た目天狗です。どごその新聞記者さんと同じ羽と下駄を履いてますもん。しかし射命丸文さんより髪は長めで、身長は今の僕（160cm程度）よりやや低めくらいです。スタイルが良いのでそのスカートがかなり似合います。

しかし気になることがひとつ…それは天狗なのに天狗ではない感じがすることです。これは気のせいなのでしょう…？

「うう…何とか大丈夫です。知っているかもしれませんが僕は蒼空と言います。あなたは？」

「蒼空？聞いたことないなあ。うちは杞々（ここ）って名前なんだ。よろしく蒼空」

あ、あるえ？

僕のこと知らないんですか…不思議なくらい皆知っていたのに杞々さんは知らないんです…

「杞々さんですか。良い名前ですね。…ってかなんで居眠りしながら飛んでたんですか？（しかもあのスピードで…）」

「それが昨日徹夜で新聞作るの手伝ってたからさーもう眠くて眠くて…あつ！！こんな処で油売ってる場合じゃない。速く取材してこなくちゃ！申し訳ないけどもう行くね。今度会った時にちゃんと話そ じゃあね蒼空」

「あ、はい。では杞々さんもお気を付けて」

疾風の如くぶつかり、消え去る少女（僕より3つほど上のようすが…）。

しかし取材というあの天狗（文）さんの手伝いでしょうか？杞々さんは文さんの部下なのでしょうか？だとしたら大変ですね…

杞々と別れた後

そのまま快適なスピードで紅魔館へ帰宅する。

無事？お使いを済ませ帰宅する。

確か真実を知りたければレミリアお嬢様と咲夜さんから話を聞けとかどこその作者が言っていましたね。

（うんうんその通りや）

僕が知りたいこと…それはお母さんのことですね。

咲夜さんも何か知っているようでしたし、それに何故か僕のことを知っている方が大勢いましたし…何か関連がある可能性は高いですね。

「ってなんで此処にいるんですか？八神さん…」

(いやぁー何となく?)

「何となくって…このままここにいたら殺されますよ?」

(大丈夫大丈夫 作者だから死にはしないさA H A H A)

「あら?何だか光るものが飛んできてますね」

(え?)

ピチューンッ

光るものが飛んできた方をみると咲夜さんが銀のナイフを構えていた。

「案外遅かったわね?何かあったのかしら?」

「それはもう…?、鬼、天狗に絡まれ…妖怪桜には死に導かれかけましたし、スキマ妖怪にも会いましたし、いきなり切り付けられるしで…最後は天狗のタックルを受けましたから…orz」

「それは大変だったわね…」

「まあいいんですけどね…処でそれどうします?」

「放っておきなさい。どうぞ死にはしないんだし、死んだら死んだで小説が終わるだけよ」

(ちよい待てーい!少しは心配しろー!そしていきなりナイフを投げ付けるな!!俺はどこぞの中国ではないぞ!?)

「それより咲夜さんひとつ聞いてもいいでしょうか?」

(む、無視ですか…うっ…)

「…何を言いたいかは分かるわ。着いてきなさい」

(あ、あるえ？これも無視ですか…？)

「どつやら全てお見通しのようですね。話が早く助かります」

作者をそのまま残し奥へと進む。

(作者なのにこの扱いって…orz)

後を着いていくとやはりレミリアお嬢様の処に辿り着きました。あの作者の言っていたことはどうやら本当のことのようですね。(かなりひどい扱いをしましたが…ウフフ)
ドアを開けレミリアお嬢様の処へ向かう。

隠された真実（後書き）

更新遅くなりました…

申し訳ないです（――）

つてか、

作者を気分で出してしまいましたw

まあ温かい目で見えてやってくださいw

肉親（前書き）

久々の更新です。

一作目を中心に執筆していたため大幅に遅れてしまいました（――）
一作目が完結したのでこれからはこれからは更新出来ると思います
ので宜しければお読みになってください。

肉親

レミリアお嬢様の所へ向かうといつも通りカリスマ感を漂わせながら紅茶を啜っていた。

「レミリアお嬢様。お話があるのですが…」

「言いたいことはわかっているわ。もうそんな時期になったのね…
…早いものだわ」

「そうですね…あれからもう20年近くたつだなんて……」

「？一体何のことですか？」

「あなたのお母さん…妃奈のことよ」

「お母さんのこと…ですか？」

「そう…あれは今から約20年前のこと…」

幻想郷にある外来人が突然行き着いた。その外来人の名は璃空。妃奈の兄に当たる人。彼はある理由から記憶喪失になっていた。彼は人間界である野望を持った人間を阻止するために一人戦っていた。その人間は組織を作り幻想郷に興味を持ち侵略及び璃空そして妃奈を組織に入れようとしていた。しかし璃空は組織に入ることはせず組織に一人で立ち向かった。そして一度組織を壊滅寸前まで追いやったが璃空も重症を負ってし

まった。それを知った妃奈は幻想郷へ璃空を送りそして一人で無理をしないよう記憶喪失にし、体に負担がかからないように八雲紫に能力にリミットをつけてもらった。

しかしある日璃空と妃奈が再び出会いその時に全てを話し記憶を戻した。

璃空は再び組織を潰すために幻想郷の住人に呼び掛け組織と幻想郷で全面戦争となった。

そして見事勝つことが出来たのだが幻想郷はかなりのダメージを負ってしまう。最初からそうなる予知していた二人は璃空の能力により全てを元に戻した。自分の命と引き換えに…

全てが元に戻ると璃空の姿はなかった。そして妃奈も体にダメージを負ってしまった。彼らはすべてを無にし幻想郷から自分らの存在さえ消そうとしていたのだが…不思議と彼らと関わった者（能力保持者の過半数）は忘れることはなかった。想いでまではさすがの璃空でさえ消すことは出来なかったのだ。

そして璃空が消えてから早4年…妃奈は人里の青年との間に子を預かった。それが蒼空。しかし生まれると同時に蒼空は能力が暴走しそれにより妃奈は命を落としてしまう。しかしそうなることさえ予知していた彼女は自分が死ぬ前に私たちに我が子を託し出産したのだった。妃奈は我が子に辛い想いをさせてしまうと悲しんでいた。それは人里で嫌われてしまうことだった。人里から彼らの存在が消えてしまった以上、彼らが幻想郷を守ったことを知らない人里の住人は呪われた力だと蒼空を軽蔑してしまう。父親でさえ最愛の人を産まれながら奪ってしまった蒼空を見放し彼は姿を眩ましてしまった。

時折様子を伺いに家に訪問すると蒼空は家から出ることはせず閉じ籠り泣いていた…そんな蒼空を放っておけず咲夜は何度か訪問したが蒼空が開けることはなかった。そしてある日…蒼空は自害しようとしていた処を咲夜が救ったのだった。その日にそうなることさえ予知していた妃奈は咲夜に頼んでいた。妃奈が予知していなければ

蒼空は今頃死んでいたろう…蒼空が人里を離れ早3年…人里の稗田阿求は人里の住人に夢幻記を広めた。蒼空が産まれてからも夢幻記を人里の住人に広めていたのだが蒼空を良く思う人はなかなか現れなかった。幻想郷を救った璃空、妃奈のことは理解したのだがその妃奈を殺してしまった蒼空を良く思える人間はなかなかおらず彼らは蒼空を軽蔑してしまっていた。しかし阿求の呼び掛けにより蒼空が紅魔館へ来て3年の間に理解する人々が増えていった。今人々へ戻っても昔のように軽蔑させることはないだろう…

「これが今まで黙っていた事よ…今まで黙っててごめんなさい…」

「…いえ…いいんです…咲夜さんやレミリアお嬢様には感謝しています。僕を快く迎えてくれましたし僕の唯一の理解者でここは僕の居場所となりましたから。でも…やはりお母さんの愛情を受けただかったです…」

「蒼空…」

「…すいません…少し一人にさせてください…」

「わかったわ…」

自分の部屋へ戻り一人考えていた。予知していながら僕を産んでくれたこと。そして死しても尚僕のことを心配してくれていたこと…でもやはり…僕はお母さんに会いたい。叶わないことだということ…はわかっている…死んだ人が甦ることはない。子供の僕でもそのくらいは分かる。でも…それでも…お母さんに会いたい…

「蒼空…少し良いかしら？」

「…はい」

扉を開け部屋へと入る咲夜。

「…あなたにまだいってないことがあるの」

「…なんですか？」

「実はあなたには姉がいるのよ。親は違うけどあの二人から産まれたことには変わらないわ」

「姉…ですか。その人は今何をしているんですか？やはり人間界にいるんですかね…？」

「いえ、幻想郷にいるわよ。蒼空も一度会ったことがあるわ」

「姉に僕が？会ったことなど…ツ！！もしかして…杞々さん…？」

「そうよ。あの子があなたの姉よ。いきなり色々言われて混乱してしまうかもしれないけど…全て真実よ」

「多少混乱はしていますが…大丈夫です」

「そう…なら良かったわ」

「姉にも一度ちゃんと話してみたいですが…やはりお母さんに会っ

てみたいです……叶わないことだということはわかっていますが……」

「あら、それじゃあ会いに行けばいいじゃない」

突然部屋へと入ってきたレミリアが意味不可思議な言葉を発する。

「……ふえ？」

い、今何て言いました？

会いに行けば……？

確かお母さんは死んだはずじゃ……

「あ……そういえばこれも言ってませんでしたね」

「咲夜……蒼空が知るわけじゃないじゃない」

「あ、あの……一体どういうことですか……？」

「ああー実はあなたも何度か訪れたことがある白玉楼に今璃空も妃奈もいるのよね……」

「……もう何が何だか分かりません……ああ頭が痛い……」

色々隠された過去を暴露された挙げ句会えないと思っていたお母さんにも実は会えます……的なこのオチ……

一体何なんですかー！！

肉親（後書き）

気付いていた方々が多いとは一作目の続きとなっています。

ある程度進んでしまつて一作目が終わるまで更新できなくなつてしまつたのです…汗

一作目をまだお読みになつていない方は少しお読みになられた方が話分かるかと思ひます。

あ、

そういえばまさかの母親に会えるという展開にしてみました…

如何だつたでしょうか？

読者の方々的には果たしてこれで良かったと思うのかどうか不安だつたりもします…

しかし更新してしまつた以上これで話を進めていききたいと思ひます。

早めに更新したいと思ひます……よ？

お母さんに会いに行こう！(前書き)

まさかの母親生きてましたーな展開になってしまいました。

お母さんに会いに行こう！

あれから僕は咲夜さん、レミリアお嬢様から妃奈…つまり僕のお母さんに会いに行ってみると良いと言われ再度白玉楼へ訪れることになったわけですよ…

そして今僕は白玉楼へ無事辿り着き門の外側に突っ立っています。あ、ちなみに今回は絡まれることはありませんでした。主に考え事をしていて絡まれてもオール無視でしたので。

「はあ…未だに頭の中が混乱中ですよ……」

いきなりあんだだけ暴露されたら誰だって混乱するでしょうねきっと。いや、しない人の方がおかしいですよね…うん。

「さて…そろそろ会いにいきますか……ってあれ？」

上空から物凄い勢いで此方に突っ込んでくるんですけど……あれって…

「ぬおおおー！」

見事にぶつかり物凄い音と共に周囲に煙が舞い上がる。

「いつつ……ああ…やっぱり杞々さんでしたか」

「うう…あれ？蒼空？ここにここにいるといつことは…あの話

聞いた…？」

「僕の姉が杞々さんだということですか？」

「あ、やっぱり聞いてきたんだ…なんかいきなり姉とか言われてもうちのこと姉だとは思えないよね…」

「最初はやはりある程度抵抗があるかもしれませんがそのうち慣れると思いますよ？逆に僕が弟で良いんでしょうか…？」

「うちは構わないよ？蒼空かわいいし」

…基準はそこですか…

しかし杞々さんは明るく元気な人…いや天狗…？

いえ、僕の姉ですね。

ずーっと一人でしたし何だか嬉しいですねえ。

「ん？蒼空どうしたの？」

「あ…いえ。少し考え事をしていました」

「考え事？どれどれ！姉ちゃんが聞いてあげるよ？wうふふ」

「姉ちゃん…ですか」

「…やっぱりまだ早いか。ごめん。蒼空の気持ちも考えないで姉ちゃんだなんて……」

申し訳なさそうに謝る杞々。しかし決して嫌だったとかではない。兄弟…ってこんな感じなんだなあとか家族ってこんなにも温かいものなんだなって思ってしまったから…

「謝らないでください。僕の唯一の家族ですし、杞々さんは僕の姉なんですから」

「蒼空…こんな弟を持っててうちは幸せだよ…うう」

「幸せ…ですか。」

「家族がいるだけで幸せになれるんですね。今はまだ僕には分からないことですけど…」

「またそんな思い詰めちゃって…蒼空はそんな顔より笑っていた方がうちは良いと思うよ？そんな顔してるとうちのパパみたいになっちゃうよ？ふふ」

「パパ…？」

「そうそう！最近でもないけど少し前にパパに会ったんだけどね。いやぁーこれが何ともあまり笑わない人でねえ…ママはどこに惚れたんだかウチには分からないよ」

「杞々お姉ちゃんのパパということは…幻想郷を守ったという璃空さんですよ？…おや？あのお兄さんとお姉さんは誰ですかね？」

「此方に近づくと若い男女。見た目は20歳程度だろうか。先程の話を聞いていたのか男の方が話掛けてきた。」

「…父親に向かってその言い方は良くないんじゃないか？杞々」

「父親…？」

「…つてことはこの人が璃空さん…？」

じゃあその隣にいるのが……

「あ…パパだ。久しぶり。それと妃奈さんもこんにちは」

「久しぶりって…3日前にも来ただろう。…文は今日はいないようだな」

「杞々ちゃんこんにちは。それと…蒼空。大きくなったわね」

「…お母さん……？」

「そうよ。私はあなたの母親の妃奈。蒼空…今までっ」…蒼空？

「…お母さん……」

話の途中に我慢出来ずに母親に抱き着く蒼空。今まで親の愛情というものを知らずに生きてきた蒼空にとって妃奈の温もりはどんなものよりも温かくそして落ち着くものだった。

「…もう困った子ね……」

言葉ではそう言うがその目はとても優しく蒼空を優しく抱き締める。

「お母さん…僕…僕ずっとお母さんに会いたかった……ずっと寂しかった…」

「ごめんなさいね…寂しい思いをさせちゃって…」

「…何で今まで会ってくれなかったのですか？」

「それは…」

「それは俺から言おう。蒼空。俺は妃奈の兄の璃空だ。咲夜やレミアから俺のことは少しくらい聞いているだろう？まあそんなことはどうでも良い。本題に入るとしよう…蒼空。お前は無意識に母親に会いたいという願望から俺たちを甦らせてしまったのだよ。その能力でな」

「…それは一体どういことですか？」

「つまりはあなたの有無を操る能力で私たちを幻想郷に呼び戻してしまったのよ」

「…そんなことが可能なんですか？」

「可能だからこそこうして俺らはここにいるんだ。しかしここから出ることはしないんだがな…」

「出れないことはないんですよね？」

「勿論。何か重要なことがない限りは出ない。元々俺らは死んだ者だからな。そう易々と外へ戻るのも死んだ者に申し訳無いだろう？」

「うん…僕にはまだよく分らないですが…」

「まあそのうち分かるさ。しかし…その能力は俺をも凌ぐ力を持っているな」

「ふふふ。私の子だもん。当たり前だよ兄さん」

「有があるだけ良いよねえ。うちは無しかないのに」

…はい？

杞々さんもあの特別な能力を持っているんですか…？

「あれ？蒼空に言っただけでなかったっけ？うちもあるんだよ。無を操る能力を…ね」

「…そうだったんですか。ってことはお母さんも璃空さんも持っているんですか？」

「勿論だ。元々俺の力だったのだが何故か蒼空に強化版として受け継がれたんだ…杞々にはそのままだったんだがな」

「まあでもうちはエレメントを操る能力もあるからね。本当にパパの能力をそのまま受け継いだよね」

「へえ…エレメントとかなんか凄そうですね」

「エレメントもチートのようなものだからね。でも私もそうだけど、兄さんも燃費の悪いスペルカードばかりでねえ…色々と苦労をしたものだよ」

「へえ…」

初めて会った家族に困惑するかと思いましたがこんなにも話やすく、そして楽しいだなんて…何だかとても幸せです。

「さて…そろそろ話も終わりだ。日が暮れる前に帰った方が良さそう」

「…え？今日はここに泊まっではいけないんですか？」

「元々白玉楼は亡霊の住むところ…生きているあなたたちがあまり滞在するのも良くないわ。まあ私たちも生きてるけど」

「…一緒にいたいのですが……」

心から離れたくないと思つた蒼空。折角会えた親と一時的ではあるが離れることは不安なのだろう。もしかしたらもう会えなくなってしまうかもしれない…そのような不安を抱いてしまつた蒼空は心底傍から離れたくないのだろう。

「そんな不安にならなくてもいつでも会えるわよ。今まで会えなかつた分寂しい思いをさせてしまつたことは本当に申し訳ないと思つているけど……」

やはり子を一人置いてこの世から去ってしまったことは悔やんでいた。

しかしこうしてまた会うことが出来たことにとても幸せに感じているだろう。これからは子の成長を身近で見られるのだから。

「…それでも今日1日くらいは一緒にいたいです」

「でもねえ…ここは私たちの家じゃないわけだし……」

「泊まりたいなら泊まっつて良いわよ」

聞き覚えのあるほわほわとした雰囲気を醸し出した白玉楼の姫君である幽々子が扇子を片手に現れた。

「幽々子さん大丈夫なの？」

「私は構わないわよ。お酒も持ってきてもらったことだし」

「じゃあ今日は泊まっていきなさい。杞々ちゃんも泊まるわよね？」

「私はママが一人だと可哀想だから」「それなら呼べば良いだろう？」
「じゃあ泊まるのかな」

「そうしとけ。『召喚』…俺の愛する文…」

(召喚といってもその場に呼び寄せる程度である)
すると何か執筆していたのだからペンを片手に現れる。

「あやややや。皆さんお揃いですねえ」

「まあまあこんなところで立ち話より中でゆっくり話しましょ」

幽々子の案により中へと案内されそこで妖夢も呼び皆で雑談する
こととなった。

お母さんに会いに行こう！(後書き)

更新が遅れました

すいません…orz

さて…

今日飲みだぜ！！(かなり私情WWW)

潰れてきますWWW

悪夢（前書き）

幸せな時間を過ごさせた蒼空に待ち受けていた悪夢とは…

悪夢

僕の母親が生きていたというまさかの展開により白玉楼へと再び足を運ぶことになった僕はそこでお母さんに会いました。更に幻想郷を命懸けで救った僕のお母さんのお兄さんにあたる…璃空さん。そしてその娘であり僕のお姉ちゃんでもある杞々さんに会いました。僕は今まで一人ぼっちだと思っていたのにまさか家族がいたなんて…

そして朝までお話をしていたわけですが…

時間が過ぎるのは早いものでもう朝になってしまい、僕は仕事もあるので紅魔館へ戻ってきました。

「うう…やはりオールは辛いですねえ…頭がガンガンします…」

ふらふらとしながら何とか紅魔館へ無事帰宅し、いつも通り仕事をこなす。

ふらふらとしながら仕事をこなす蒼空を心配してか咲夜か近寄ってきた。

「今日は疲れてるみたいだしゆっくりしててもいいわよ？」

「いえ…私情で仕事を休むわけにはいきません。それに咲夜さんの負担を少しでも減らしたいので」

「ふふふ、ありがとう。でも無理はしちゃ駄目よ？」

「分かりました」

と言いつつも…やはりかなり辛いですねえ。栄養ドリンクの一つでも飲んでおきたいものですね。まあそんなものありませんが…

さて、まずは掃除…ですね。今日は紅魔館の廊下でしたね。少し妖精メイドの方々にも手伝ってもらいましょう。さすがに今の状態でこの広さを掃除するのは死ねますからね。

「あ…丁度良かったです。皆さん。廊下を掃いてもらってもいいですか？僕はモップで掃ききれなかったゴミを一掃しますので」

「わかりました」

この人数ならすぐに掃き終わるでしょう。さて…モップを持ってこなければ…

少年移動中……

「さて、そろそろ掃き終わった頃でしょうか。モップ掛けをしましよ」

そうついと一階から順にモップ掛けをし始める。

モップ掛けの作業は簡単な方であつという間に屋敷の半分を掃除終わる。

「あと半分くらいですね。早めに終わらせてすぐに洗濯をしなくては…ん？何でしょうこの匂い…は…」

少し甘い匂いが周囲に広がる。その匂いの効果にすぐに気付くことが出来なかつた蒼空…深い眠りへと導かれてしまふ…そう…これが悪夢の始まりだと知らずに…

「あ…やば…睡魔…が」

バタ…

なす術なくその場に倒れ込む。目が覚めるとそこは見たことのない地だった。

草木は枯れ、荒れ地と化し周囲には生き物の気配すらなかった。

「ここは一体…確か僕は掃除をしていて…あ、確か甘い匂いが漂つてきて僕はそのまま意識を…」

まさか拉致された…？

いや、あの場には確かに僕しかいなかったけど紅魔館にはレミリアお嬢様を初めとしたとても強い方々が多々多く居るし…そんな紅魔館に忍び込めるわけがないですし…
では一体…

その場で考えてみるが答えは見付からなかった。

「…仕方ない。ここにいっても問題が解決するわけでもないですし、

少し周囲の様子を見て回りますか」

適当に歩き始めること数十分。幼い女の子の声が聞こえてきた。

「う…う……」

「ッ！！この声は…女の子？」

そこには女の子が1人泣いていた。何故こんな所にいるのか、親と離れてしまったのだろうか、いや、それ以前にこんな所で女の子1人置いていけない！！
蒼空の善意で女の子の元へ駆け寄った。

「こんな所でどうしたの？親とはぐれちゃったのかな？」

「う…う…お兄ちゃんであれ…？」

「僕は蒼空。気が付いたらここにいたんだ」

「そう…お兄ちゃんが今度のターゲットなんだ…」

「え？どういこと？」

先程まで泣いていた女の子はスッと立ち上がり此方を向き一言発した。

「お兄ちゃんは美味しいかな？」

顔は髪で隠れ、その顔を見ることが出来なかったのだが…まるで飢

えた猛獣の如く殺気を醸し出す少女に恐怖すら覚える。

「え？ちよ…君は一体……」

「あたしい？あたしはねえ…ここの住人だよお？お兄ちゃん…お兄ちゃんのその美味しそうな肉をあたしに頂戴…」

隠れていたその少女の顔が露となった時、僕はその少女から二、三歩後ろに後退りしていた。

その少女の顔があまりにもひどかった。頬は爛れ落ち、目に関しては飛び出していた。そして口が余りにも大きく一言で表すと化け物そのものだった。

「ひ…」

「お兄ちゃんなんで逃げるのお？あたしから逃げないでよ…食べられないじゃない…ふふふ…」

「人間じゃない…化け物だ…」

「化け物？酷いなあお兄ちゃん…そんなお兄ちゃんはすぐ殺さないで少しづついたぶってから食べることにするから楽しみにしててよ…」

「く、来るな…!」

思わず逃げ出す。あまりにも気持ち悪いその外見に怯える。

「待つてよお兄ちゃん！あははははは…!」

「気持ち悪い…あんなの見たことない…これは夢だ。夢だよ。き

つと…」

走りながら後ろを見ると…やはりあの気持ち悪い少女がいた。しかも少しずつ距離が縮まっていた。

「ひ…来るなー！！気持ち悪いの来るなー！！」

最早半泣きで全速力で逃げる。

ピタッ…

突然少女が足を止めた。

「…え？」

「気持ち悪い気持ち悪い…好き勝手言いやがってよ……てめえ何様だ？ああ？」

突然口調が変わりだした。そしてその顔に更なる恐怖を覚え、殺気が半端なく伝わってきた。

「小僧…すぐに喰ってやるよー！！」

此方に物凄いスピードで近寄ってきた。

あまりなスピードに逃げる事が出来ずそのまま押し倒される。

「ぐ…（力が強すぎる…身動きが…）」

「く…くく…久々の肉だ…」

蒼空の顔に滑る生暖かい液体が垂れ落ちてきた。

「（なんだこれ…ッ！！）くっさ！！これ唾液ですか…」

「ん〜？おお悪い悪い…何せ久々の肉なものでな…涎が出ちまつたぜ…」

「く…簡単には喰われるわけにはいきませんよ…」

抵抗するがまだ筋肉も未発達である蒼空はその化け物に力で勝てるわけもなく抵抗は相手の怒りを買うだけであった。

「チツ…動かれると食いづらくて仕方ねえな…少しは大人しくしてろこの糞餓鬼！！」

「う…あ…が…」

口の中に鉄の味をした生温くものが広まっていた。あまりの多さに口から垂れてしまった。

「なんだあ？どっか内臓でもやっちゃったか？…ったくこれだから人間は…」

「う…ゲホッ…ゴボッ…」

多量の吐血をする。

そして腹部に激痛…

先程の化け物の言う通り内臓が痛んだか破裂してしまっただらしい…

ブチ…

何かがキレた。
そんな気がした。

「いつ…てえなカス…」

「あ？なんか言ったか糞餓鬼」

此方も口調が変わった。今までの可愛らしい蒼空の姿は微塵もなかった。

「いつまで俺の上に乗ってんだよ…オラァ!!」

「ぐ…」

あの化け物を片腕で吹き飛ばす。

まるで僕じゃないようだ…あ…やばい……また意識が…

僕が最後に覚えているのはあの化け物の恐怖したあの表情だった…

悪夢（後書き）

はい、

どうも美容師の卵っぽい感じの八神凜です。

更新大幅に遅れてしまいましたね。

ええー暇人様に今日か明日には更新しますと宣言致しましたので今日2時間？程度で仕上げました。

ちゃんと確認をしていないためわけわからないところがあるかもしれませんが（脱字誤字がひどいかも…）

さて、

毎回のことですが私情を少し…

7月19日に行われる県大会に向けて日々頑張っているわたくしですが、そのあとに行われる最初から東北大会というセンター？の大会があります…：それにも選ばれました。

なのでわたくしには夏休みというものが存在しなくなったということが判明いたしました。

と、いうことは更新がひどいことになりますね。はい

何とか週1回のペースで更新したいとは思っています…！

かなり私情申し訳ございませんm（——）m

悪夢 その式（前書き）

更新大幅ダウン誠に申し訳御座いませんorz

忙しすぎて更新する暇がありませんでした…

しかし

暇人様の一声によりわたくしに元気とやる気が注入されたので約1時間30分程度ですが仕上げました。

それでは続きをどうぞ。

悪夢 その貳

意識が戻り周りを見渡す。すぐ目の前に原形の留めてない何かがついていた。

「これは……う……」

あまりのグロテスクさに吐き気が襲う。

見た目でさえ気持ち悪くなるというのに追い討ちをかけるかのように異臭が鼻をさす。

「僕は一体……ッ！……こ、これは……？」

自分の目を疑った。

ふと手を見ると夥しい返り血を浴びていた。

それは紛れもなく目の前に転がっている死体のものだということに気が付くのに時間はかからなかった。

「……僕が……殺した……？」

信じたくなかった。

原形を留めてない死体を殺ったの自分であるということに……

しかし覚えはあった。

自分の中に眠るもう一人の自分が殺ったという真実に。

「う……あああああ！……嘘だ！僕は……こんなことしていない……僕じゃない……誰か……誰か助けてよ……」

真実を受け入れられなかった。自分であり自分でない存在を否定す

ることが出来ない。眠っているもう一人の自分に恐怖すら覚えていた。

「う…う…どうしてこんなことに…」

蒼空は嘆いていた。最早どうしていいかさえ分からない。自分が仕出かしたことを受け入れられなかった。

すると何処となく声が聞こえてくる。

（いいじゃねえか。化け物を殺したところで何もかわりはしねえよ）

「ッ！！…誰？僕に話し掛けるのは…」

（ああ？誰とは失礼な奴だな…相棒）

「相…棒？」

（そうだ。俺はお前であり、お前は俺だ。これで理解したか？）

「…つまりもう一人の僕…？」

（おお！！分かってるじゃねえか！物分かりがよくて助かるぜ。さすがもう一人の俺だぜ…くく）

「じゃあ…あなたが殺ったの？僕の体に乗っ取って…」

（まあそうなるかな？）

「何でこんな酷いことを…殺s（俺が殺ってなきゃ今頃死んでたんだぜ？相棒）…それでも僕は殺しはしたくないんだ…」

(くくく…果たしてそれが本音なのかな?)

「な、何が言いたいんですか…?」

(精々今はそう思っているが良い。相棒…)

いずれその身体もらうぜ)

その言葉を最後に相棒と読んでいた者の気配が遠退く。

「…一体何がどうなっているんでしょうか…」

自分の中にもう一人の自分がいる…

予想外のことに困惑する。もう一人の自分…

僕を相棒と呼んだ者はいわゆる僕の中の黒い存在。

恨み、怒り、憎みといったものが積もりに積もって僕自身が作ってしまった存在…とでも言うのでしょうか?

だとしたら僕に責任があります。どんなに隠していても人里の皆を恨み、憎んでいたことは言い逃れは出来ない。

わけも分らず忌み嫌われ、邪魔者扱いされ続けられた僕は心のどこかで憎しみを抱いていたのでしょう。人は皆誰かに憎しみを抱くものだと思えます。しかし僕の場合はその憎しみが強すぎてしまった。そしてもう一人の自分という形で黒い自分を作ってしまった。

「…自分1人で解決しなくてはいけないことです…ね」

僕ももう子供じゃない！！（いや、まだ子供だけど…）自分が生み出した自分の対立する存在くらいは自分で解決しなくてはならないでしょう。

「しかし…やはりここがどこなのかわかりませんね…弱りました」

あれからというもの小一時間歩き回っているが一向に糸口らしきものは見付からず現在もさ迷い中である。

「はあ…少し休憩することにしてしましよう。さすがにこの暑さの中歩き回るのはかなりの体力を消耗してしまいますし」

炎天下のこの場所は強い日差しと共に湿度が高いせいかじめじめとした最悪な環境。

それを飲み物を飲まずに歩き回り続けたら日射病を引き起こし兼ねない。

ちようど一本の木（妖しい木だが…）があるのでそこで休憩することにした。

「ふう…何だかここはやけに涼しいですね。…日陰だけってわけではなさそうで…なッ！！」

その木周辺だけを残し世界が突然変異する。

先程までのじめじめとした環境から一変、真冬となっていた。

突然のことに多少の驚きはあったがそれ依然に寒い…先程の暑さからのこの寒さは最初は涼しいと思えるのだが汗が冷え体温が低下してしまう。

体を震わせながら回りを見渡すとそこは綺麗な真つ白の世界が一面に広がっていた。

今は吹雪いてはいないようだが空を見るとすぐにでも天気が悪くなりそうだ。

早いとこ移動した方が良さだろう。

「に、しても寒すぎますね…このままでは無駄に体力を消費してしまいますね。…仕方ないですね。防寒具を出しますか」

能力を使用し、防寒具を身に付ける。

他人が見たらスノーボーにこれから行くのですか？

と、言いたくなりそうなのは秘密です。実際スノb… スノーボー？
そうですね。僕天才ですね。スノーボーに乗り移動すればいいじゃないですか！ うふふ

スノーボー一式を具現化し滑る。

実際ちゃんと滑れてるかと聞かれてしまうとある程度としか言えません。

ターンまでは普通に出来る程度なので滑るには問題ないでしょう。

数分後今度はやたらでかい屋敷が見えてきた。

「…どうみても妖しいですよね…でも中に入らないと何も変わらなそうですね。これ以上滑っていても何も無さそうですね」

スノーボー一式をそのまま消し去り屋敷の中へと入る。すると中は不

自然なことにも人気もなく、屋敷も荒れているにも関わらず温かい…
そして蝋燭があちこちに置いてあり中は明るかった。

「妖しい…怪しすぎますってこれ…」

嫌な予感がたつぷりとする。うん、これかなり僕の本能的にもここからさつさと出た方が良いつて言ってる。この屋敷からは何の気配もしないですが…しないはずなのにここには先程の化け物とも比べ物にならない程の力を秘めた何者かがいる…

危険…

今の僕に勝てるだろうか。疲労感…そしてあの黒い自分がいつ出てくるか分からないという恐怖を背負ったまま…

しかし引くことはせず屋敷の奥へと歩み進む。

「弱気になっちゃいけませんね。僕自身で解決しなくてはならないことですし、誰も助けてはくれない。甘えていてはだめですね」

しかし蒼空はこの時知らなかった。四方八方から複数の不気味な笑みをしながら此方を見ている者達がいたことに…

悪夢 その貳（後書き）

皆様が思うことを当ててあげましょう。

それは…

これって

東方なのか？

っていう疑問ですよね。

はい、

わたくしも自分でもかなり疑問です。

でもこれから繋げるのでご安心を。

それと軽くネタバレしてしまいますが

今回は夏といえばのあれ系で書きたいと思います。

それでは次回の更新までお待ちを…

悪夢 その参(前書き)

なんか主旨が全くもって変わってきてるような気が…

悪夢 その参

あれから僕は屋敷内を隈無く搜索したが何も見付からず現在立ち往生しているところです。

「何も見つかりませんね。あ、そういえばまだ二階がまだでしたね。確か階段…階段…（怪談…）あ、ありましたね」

二階へ通じる階段の目の前に行くところから怪しい声が聞こえてくる。

「？今何か聞こえたような…おや？」

薄暗い奥から誰かが此方に歩いてきている。

…悪い予感しかしないのは気のせい？
逃げる？

これ逃げた方が良いよね？ね？

すぐに逃げる体勢を構える。

「そこいく坊や…」

その声の主は髪をツインテールにしている右側に狐のお面をし、着物を着ている若い女性だった。

「…何でしょうか？」

怪しい…

怪しすぎますよこれ。まずここは僕しか人間はいませんし、こんな綺麗なお姉さんがいるわけがないです。

「…なぜそんなに警戒しているの？」

「（…怪しいと言ったら失礼ですかね…）あ、いえ…不気味な屋敷なものでつい」

「…そう」

違和感がある。

このお姉さんはまず人間ではないのは確実ですね。生気がまるでない。

「あの…あなたは何故ここに？」

「…わたし…？わたしは…探し物をしているの」

「探し物？」

「…うん」

「じゃ、じゃあ一緒に探しましょうか？」

…僕は一体何をいつているんでしょう。

怪しすぎるのに僕としたことが良心でつい…

「…いいの？」

「構いませんよ」

とりあえず笑う。

営業スマイルではないですがとりあえず笑う。

「…ありがとう。じゃあ…」

いきなり帯を緩め、着物を脱ぎ始める。

「え？ちよ…／／／」

中に下着を着ているわけでもなく肩から露出されていく。蝋燭により少しだけ照らされて見える白い肌はどことなく色っぽく見えた。

だが、しかしそれも次で消し去る。

胸から腹部に差し掛かると内臓は飛び出していた。

あまり見えないのが幸いだろうか…

「…あたしの内臓…どこお？」

「…はい？」

やっぱり来た…

このパターンもう嫌だなあ…

3、2、1…

スタート!!

何かされる前に階段を全速力で掛け上がる。

後ろからは何も聞こえるわけでもなく、振り向くこともしなかった
ので状況はわからない。

ギイイ…

ボタン

「…ハアハア。もう何がどうなっ…て…」

汗が一気に出てくるのが分かる。

部屋の中へ隠れ入って今ドアを押さえている状態なのですが…

真っ暗な部屋の中に考えたくもないあの気配を感じてしまった。そしてその気配は僕のすぐ後ろにあった。

「…どうして逃げるの？」

「うぎゃあああああ！！」

ドア開けまとも逃走。

怖くて顔を見ることは出来なかったがあの優しそうな声は先ほどのお姉さんだと察する。

そして違う部屋へと入り、物陰に隠れる。

「帰りたい帰りたい帰りたい…」

耳を塞ぎ現実逃避。

もう嫌だ…

「そこの坊や…」

「ッ！！」

耳を塞いでいても声が聞こえる。

そして声の主の方へ恐る恐る振り向くと…

花？

「ふえ…?」

あまりの予想外のこと一気に気が抜けてしまった。

そこには花瓶が2つ置いてあるだけだった。

しかしただ綺麗っただけでは終わるはずがなかった。

「つつかよお…まじ最近水も変えてくんねえよなあ」

「確かに…あの腐れババアサボリやがってんなあ」

しかめっ面で花が愚痴ってます。

はい、

おまいら最早花じゃないですね。

「なあそこの坊や!!」

「は、はい!?!」

まさかのふりに声が裏返る。

「水変えてくんねえか?」

「え?」

「だから水変えろって。最近あのババアが水変えっ…」

ポトツ…

目の前に先ほどの花の首が…

そしてその後ろに先ほどのお姉さんが…

「ッ！？あ、いやち、違うんだ。別に…」

同じように何か刃物で首を跳ねられる。

花だから血は出てないけどなんか気分が悪くなります。

「…なんで逃げるの？」

「すみません…でも…」

怖いものは怖いですからごめんなさい！…！

部屋の出口へ再び全速力で逃げる。

ところがいきなり足を捕まれてしまいそのままバランスを崩し床に倒れる。

何が効いたのかわからないが腕は離れお姉さんは灰と化した。

最後こちらを見る目はどことなく悲し気な目をしていたことが心に引っ掛かりましたが…そして今はまた探索を開始し広い部屋から狭い部屋を隈無く調べた。

途中何か幽霊っぽいものが出たり、再び物が喋ったりしていたものは全て蹴散らした。

そして一階から三階まですべての部屋を調べたがああのが禍々しいほどの力の主の姿はなかった。

一度一階へと戻り、壁に凭れると…

ギィィ…

「わわ…」

隠し扉により地下へと落ちていった。

地下へと降りるとそこはやはり真っ暗で何も見えない。

あ、ちなみに何で落下して死んでいないかはわかりますよね？

そりゃあ飛べなかつたら死んでいたかとは思いますが…

飛べてよかつたと思いました。

この時は能力に感謝しました。

能力により蝋燭に火をつけ回りを照らす。するとそこはどつやら牢屋やしき場所だった。

しかもここは一括して入れる場所らしくやたらでかい。

いや…ここは牢屋ではなく処刑部屋だろうか？

処刑する物がおいてある。もう古くて使い物になるものはないようですが…

「人間か？」

…ここにも居ましたか…

はあ…嫌ですねえ…

「どうした？気分でも悪いのか？」

「はい。もう幽霊は懲り懲りですので…では消えてください…」

もう嫌気がさしたのでお姉さん同様思い付く全ての物を放り投げようとしたが…

「…いや、わたしは幽霊ではないのが…」

「ふえ？」

あら本当だ。

この人間です。

ちゃんと生気があります。生きてます！

やっと人間に会えました！！感動ものですよこりゃあ。

「だ、大丈夫？なんか泣いてるけど…」

「あ、すいません…何でもないんです」

あまりの嬉しさに涙が出てしまいました。

「しかしあなたは何故この屋敷に？」

「わたしか？わたしは…願いを叶えるためにここに来たのだが…」

「願いですか」

「ああ…そういえばまだ名前を言っていなかったな。わたしはりん。君は？」

「あ、すいません…僕は蒼空です。りんさん、その願いは聞いても大丈夫ですか？」

「構わないが…長くなるぞ？」

「構いませんよ」

適当に座るところを見つけ話を聞く。
その話というのは…

わたしは昔ある一人の女性に恋をした。

最初は人を小馬鹿にするような人で何とも思っていなかったのだが…ある日を境に彼女の魅力にどっぷり浸かってしまった。

そしてある日わたしは彼女に告白。

彼女の答えは

はい

だった。

わたしはそれからというもの彼女を大切にしてきた。しかしまだガキだった自分は彼女を傷付けてしまった。

そして半年後に別れを自分から言ってしまった…

それを後々に後悔し何度もアタックを試みたが彼女が応えてくれる日は来なかった…

そして月日は流れわたしはもう二十歳を超えていた。それでも尚わたしは彼女のことを大好きだった。しかし彼女と会うことも許されなかった。会う約束をしてもそれは叶わなくなってしまうばかりで…彼女はわたしのことをどう思っているのか分からないがわたしの想いが朽ちることは一生ない。

それほど彼女のことを好きだったんだ。

しかし彼女はある日…

交通事故に巻き込まれてしまった。

いや、正確には子供を助けるために自らの命を犠牲にしてまでその子供を助けた。

わたしは嘆いた。彼女がいない世界なんて考えられない。

そんなわたしはやってはいけないことを試みることにした。

それが悪魔との契約。

自分の体もしくは寿命などを代価として払い彼女を甦らせようとした。

そしてわたしはある日この世界へ自ら歩み入った。
ここは化け物が数多くいるが不思議と襲われることはなかった。
ここは『悪夢の世界』というところでその王に君臨するのがこの屋敷の主でもある…
華音かのんという悪魔。わたしはさすがの思いでその悪魔と契約を交わした。しかし等価交換だと言われてしまい、わたしはどうしようもなかった。彼女のいない世界で生きていても意味はないがそれでもわたしは自分の命が惜しかった…そんなわたしは自分に嫌気がさし何十年もの間ここに閉じ籠っていた…

そう、

りんさんは愛する者のために自らこの世界に入った。しかしその願いは叶えられずここに閉じ籠っていた。

僕にはまだ恋愛というものがわかりませんが
何故でしょう…

愛する者を失うという辛さは分かります。

その話を聞いて僕は泣いていた。気が付くと涙が出ていた。

そんな僕の姿を見て

「君は心優しい人間なのだな」と一言言ってくれた。

りんさんのしようとしたことは決して許されることではないでしょう。

元の世界へ戻ることも許されずこうして何十年もの間自分を責めながら生きてきたのでしよう。

りんは自分の過ちを僕に教えてくれたんだ。

「君はそんなことをしようとは思ってはいけない…早くこの世界から出るんだ」

「しかし…出る方法が分からないのです」

「君はどうやってこの世界へ来たのだ？」

「気が付いたらここへ…最初はじめじめとした所だったのですが突然変異で真冬になりこの屋敷へ来たのです」

「…となれば…彼奴しかいない…か」

りんさんのいうあいつというのは

どうやら夢を操ることが出来る者らしく、

睡眠術やらで眠らせ気まぐれでこの世界へ連れてくるのだとか…厄介な奴ですね。

「そいつを見付け出し倒せば君は戻れるだろう。しかし間違ってもこの主には手を出さないように…華音は見た目からは想像もつかない強大な力の持ち主だ」

「分かりました。いろいろと助かりました…りんはこれからどうするのですか？」

「構わんよ。わたしは自分の過ちを一生償うためにここにいるぞ。この命が朽ち果てるまで…な」

「…そうですね。では僕はもう行きますね」

「ああ、じゃあな蒼空」

僕はりんさんを止めることは出来なかった。
僕が止めて言いわけがないです…

さて…僕を眠らせ夢を操りこの世界へ葬りやがったのは一体どこ
どいつでしょうか？

「見付け次第お仕置きが必要ですね」

集中し妖力やしきものを察知する。
するとこの屋敷の…下に二つ…？
しかも並んで…ですか。

りんさんごめんなさい。

華音という悪魔と戦闘になるかもしれませぬ。

どうやら夢を操る程度の能力者と華音は仲が良いと見ました。

さすがにきついですねえ…今の僕に勝てるかどうか…いや、迷って
いる暇はありませんね。

前に進むしかありません。さて…
覚悟を決め行きますか。

地下へとゆっくり降りていった。

悪夢 その参（後書き）

実は金曜日（6日）には出来上がっていました。

今回はなんかよくわかりませんね。はい

ちよつとしたホラーと恋愛ものを入れたかっただけでして…

まあいつもの思い付きにより書いてみました。

ちなみに若干ネタをパクらせていただきました。

気が付いている方がいるかもしれませんが

結んで開いて羅刹と骸の歌詞をちよつとパクっただけです。

はい

また忙しくなるので更新が大幅に遅れてしまいかもしれませんが…

何とか頑張りますので

皆様どうぞよろしく願いたします。

何か指摘、感想が御座いましたらよろしく願いたします。

悪夢 その肆（前書き）

またもや遅れてしまいましたorz
申し訳ございません。

キャラ崩壊注意です。

悪夢 その肆

地下へと降りた僕は妖力と禍々しいほどの威圧感、そして強力な力を秘めていると思われる華音の魔力を察知し今その二人がいる扉の目の前で1人立ち止まっている。

「ここにいますか？ 地下はやたらと力の持った幽霊やら妖怪が多かったですね…」

地下へと降りてからというものの番人といってもおかしくないほどの力を持った者がそりゃあもううじゃうじゃ…
まあ片っ端から捻り潰しましたがね。

案の定魔力もかなり消耗してしまったのは内緒です。はい。

「まだ魔力も戻らないと言うのに…困ったものですねえ。もう少し魔力が回復するのを待つ…」

ギィィ…

突然扉が開く。

感付かれてしまいましたか…

「いつまでそこにいるつもりだい？ 坊や。中へと入っておいで」

…この声が華音？

いや、それにしては透き通った綺麗な声のような…

そのまま素直に中へと入るとそこは悪魔らしからぬ部屋でした。紅魔館ともまた別でそこは屋敷というよりもお城に近い感じですよ。王女様みたいな部屋ですね…

奥へと進むと若く綺麗なお姉さんと幼い男の子が仲良くお茶をされていました。

…あなたたちは一体何なのですか？

「そんなところにいないで此方へ来なさい」

「…あなたが華音さんですか？」

「私を知っているのかい？坊や」

「はい。りんさんからいろいろと聞きましたので」

「りんの坊やにも会ったのかい…そうかい。まあ少しお話をしようじゃないか。用事があつたんだろ？」

「そうですね。でも僕が用事があるのはそちらの男の子です」

そう…君に僕は用事があるのですよ。さすがに僕より幼いし、殴ることはしません。が説教くらいはしとかないと僕の気が晴れませんね。

「…テン。また何かしたのかい？」

「…(しれッ)」

…しれッ

じゃないだろあ!!

何ですかその態度は!?

「はあ…やったんだねえ。坊や。この子が何をしたのか言ってくれないか?」

「…はあ。分かりました」

今までの出来事を出来るだけ詳しく華音さんに話す。

その間テンはというと少しだけ焦っていたような気がします。華音さんに怒られればいいのですがね…ウフフ

「なるほどね。まあ全てテンが悪いわけか。さて…テン…分かるよねえ?」

うわあ…

その最高の微笑みが物凄く怖いですね…

僕に向けられたら冷や汗びっしょりものでしょうね。さて、テンは…

ああ予想通り冷や汗ものでしたか。

「…だ、だって暇だったんだ「暇ねえ…」「…ごめんなさい」

お、おつかないですねえ…そろそろその微笑みやめてもらえませんか？

僕までとばっちりがきs

「坊や」

来ちゃった…

なんか嫌な予感がするのは気のせいですよ？ね？

「な、何でしょうか？」

「この子の仕出かした事は私の責任だ。それなりの謝礼はしないといけないねえ…」

「あ、いえ…無事に元の世界に戻してもらえればそれだけでいいんですが…」

「うーん…坊やがそういうなら私は構わないのだがn…」

華音が言い終わる前に奥の部屋から物凄い物音が響く。

ああ…また良からぬことが…orz

物凄いスピードで此方へ向かって来た見た目少女は華音さんによく似た悪魔でした。華音さん同様に漆黒の翼があり、緑のドレスを着ていました。

「華音姉様！！遊ばし！！」

「志音。今お客が来てるんだ。後にしなさい」

「お客？…ん？人間？」

「初めまして。僕は訳あって今ここにいる蒼空です」

「私は志音だよ。むー遊びたかったのになあ…あ、蒼空私と遊ぼうよ」

「やっぱり来たー！！」

「そうなると思ってましたよ！！」

「まるで妹様みたいですねえ…ああ僕ってやっぱり不運…orz」

「「こらこら…お客にそんなことさせるわけにはいかないだろう？」
絶対死ぬしねえ…」」

「良いこと言ってくれました！華音さん。」

「今の僕は魔力もかなり消費していて志音さんを相手に出来る状態ではないですからね。」

「…しかし何か死ぬ的なことが聞こえたような…
気のせいですよね…？」

「ええー！だって暇なんだもん…」

「わかったわかった。…蒼空すまないがこの子の相手を少しだけでいいからしてくれないか？（危なくなったら止めればいいか…私はだるいから相手したくないしねえ）」

「（何か僕良いように使われているような気がするのですが…）申し訳ないんですが僕今魔力が切れかかっています…」

主にここまで来るのに消費したんですがね！！

「そうなのかい？んーじゃあ魔力を回復させればいいのかねえ」

此方に手を向けると同時に全身に力がみなぎる。

「…これは？魔力が回復した…？」

「私の能力で坊やの魔力を回復させたのさ。まあ全快とはいかないがある程度は回復したんじゃないかねえ？」

いやいや…確かに全快ではないですが、ほとんど全快ですよこれ！！

…やはりかなりの力を持っているようですね。回復させるとしても自分の魔力を分け与える感じでしょうくに全くもって華音さんの魔力が消費した感覚がありませんね。

僕はそれなりに魔力もあるというのに…それをここまで回復させるだなんて…
だけど…

「…回復したってことはやっぱり遊ぶ（多分弾幕ごっこですよね…）のですよね…？」

「もちろん」

ああやっぱりですか…
まあ仕方ないですねえ…

「じゃあ蒼空遊ほ」

「構いませんが…何をして遊ぶのですか？」

弾幕ごっこじゃありませんように…

「戦闘」

…確かに弾幕ごっこではなかったですね。

でも僕の期待していたことはそれじゃなかったのですがね…ああ泣けてきます…泣

「はあ…仕方ありませんね。少しだけなら付き合いますよ。終わったら元の世界へ戻してくださいね？」

「ああ、そこは私が保証するさ。まああとはテンの坊やには私から言っておくよ」

「お願いします。…さて、志音さん…や（殺）りますか？」

「うん」

そんな笑顔になられてはやりづらいですね…仮にも僕より（見た目

は) 幼いというのに。

「じゃあ行くね 少しは私を楽しませて…ね!!」

「ちょッ!!」

悪魔というだけあって身体能力が高く、物凄いスピードで突進してくる。

不意打ちとはいえ直線の突進は避けるのは容易い。

あれだけのスピードでは曲がることは不可でしょう。

少し横にズレそのまま通りすぎるはずだったのだが…

「坊や…甘いねえ」

華音がそう呟くと同時に…

「がッ…!??」

肋骨が折れる感触よりも抉り取られたといっても過言ではない痛みと衝撃が襲い掛かる。

そのまま屋敷の壁へと吹き飛ばされ壁にめり込む。

「だめだよお〜? そんな簡単によけるわけがないじゃん」

「う…ガハッ… (左側の全ての肋骨が…それと、内臓そして背骨までやられましたか…)」

「志音…もう終わりだねえ。坊やを殺しちゃいけないよ?」

「ええ〜まだ遊び足りないよ〜」

…これを遊びといいますか。威力、そしてスピードとコントロールまで出来るとなれば最上級の悪魔とでもいいますね？
しかし…このまま終わるわけにはいきませんね。

「ご安心を。僕はまだやれますよ？」

「坊や。はあ…お互い血の気が多いねえ」

心配をよそに続けると言い張る僕を見てやれやれといった感じの華音さん。

傷が全て消えていたことより心配してくれたのですね。優しい方ですね。

「やった ありがとう」

「いえいえ。さすがに一撃で終わるのも、やられっぱなしってのも僕のプライドが許しませんからね。すいませんが少し本気を出させて頂きます」

「望むところだよ！もう一度死にさら…」

時が止まる。

いや、正確には止めた。

そして時を止めたまま弾幕を放つ。

よける訳もなくそのまま直撃する。

そして全ての弾幕が直撃したのを確認すると時が動き出した。

「ッ！？っ…きゃあああああ、あ、あ！？！」

突然の激痛にそのままたおれこむ。

「…『時符 時の番人』とでも言うておきますか。咲夜さんの能力の応用版ですかね…ふふ、仮にも悪魔ならばすぐ再生を試みてく
ださい」

先程までの蒼空とは違い、表情、そして…性格が変わってきていた。

「…うう。なかなかの攻撃だったよ…久々にあんなにダメージを負った気がする。(しかし…時の番人…あれは厄介かも。あれは避けることが出来ない…か)」

「…ふふふ。良い…良いですよ…実に良い。悪魔の端くれならばその程度のダメージどうってことないでしょう？まだ此方も満足していません…これからが本番…だ！！」

「ッ！？…ぐッ」

距離を無くしそのまま蹴りを溝へとヒットさせ、飛ばした後方に弾幕トラップを直ぐ様仕掛け発動。

だが…

それが志音に当たることはなかった。

「坊や…そこまでだよ。これ以上の戦闘は私が許可しない」

「お姉様……」

「大丈夫かい？少し助けるのが遅れたね」

そういうと抱き抱えてる志音の傷を癒し、そのまま地面へと降りてきた。

「さて……坊や。何で坊やはその能力ですぐこの夢から覚めなかったんだい？いや、それは聞かずとも分かることか」

「俺……いえ、僕は突然此方に連れて来られて混乱して……それは嘘だねえ」……何が言いたいんですか？」

「途中から能力を使えばこの夢から脱出することも出来るということに気が付いたが、自分の中のもう一人の存在に怯えていた。このまま戻ってしまったって大切な人を傷つけてしまうんじゃないか……ってね。違うかい？」

「……ふう。全てお見通しってことですか。確かにその通りです……僕は能力を使うともう一人の僕に意識を持ってかれてしまいます。こんな不安定な状態で戻るわけにもいかないでしょう？どうすればいいのか僕には分かりません……力を貸して頂けませんか？」

「最初から気付いていたがあえて何も言わなかったのさ。それはこの世界に来る外来人によくあることでね、力のあるものは必ずと言っていいほどなるんだよ。まあこんな話を聞きたいわけではないだろうから手短かに話そうかねえ……もう一人の存在を消すには直接戦って打ち勝つしかない……のさ」

「打ち勝つ…ですか。」

「そうさ。私の力でもう一人の存在を坊やから引き離して戦うのさ。
…覚悟はいいかい？」

「はい。お願いします（もう一人の僕…悪の自分に負けるわけには
いきません）」

「じゃあ行くよ…」

華音さんの力により目の前に僕と同じ容姿をした悪の自分が現れる。
容姿は同じですが身に纏う雰囲気は全くもって違います。それは憎
しみなどが積もりに積もった負のオーラでした。最初に感じていた
頃よりもその力は強くなっている気がします…多少なりとも僕の力
と相殺していたとでもいうのでしょうか？

数秒沈黙があつた後、
もう一人の僕が口を開く。

「よう相棒。悪いがその体…今度は完全に俺のものにするぜ？」

「あなたみたいな存在にはやりません。何より負けませんから」

「くくく…相変わらず強情だな。まあ…いつまでそんなことが言っ
て…られるかな…！」

右手に物凄い魔力を溜め込み、そのまま此方に向かってくるもう一
人の存在。

果たして蒼空の運命は。

その決着は驚きを隠せないほどだった…

悪夢 その肆（後書き）

とりあえず…

更新頑張ります。

応援していただけると嬉しく思います。

悪夢 その伍（前書き）

更新遅れました。

今回は妥協しちやったり…orz

悪夢 その伍

「さて…困りましたね」

文字通り今僕は困っています。

それは何故か？

簡単です。

目の前にいる容姿がそのままのもう一人の僕が原因です。

もう一人の対立する存在である悪の蒼空に打ち勝つために全力で戦っていたが全て同じスペルカード、そして同じ力で相殺。

一向に決着が着かず小一時間が経過。

「同じ力で同じスペルカードでは決着が着きませんねえ…」

「相棒。何か勘違いしていないか？お前とこの俺が同じ力？笑わせるな」

「…あなたは僕の分身でしょう？同じ力に決まってるじゃないですか」

「くくく…そうだといいいけどな。せいぜいそう思っていればいいさ」

むっ…

なんかバカにされてますね。

魔力も霊力も全くもって同じはずなのにこの余裕は…何かしらあるとでもいうのですかね？

いや、そんなはずは…

「そんなに疑うことないだろう。自分の分身が自分より勝ることが考えられないのか？やれやれ…哀れだな」

「…おちよくるのはその辺にして続きといきましょうか。それに僕より勝るといっているのであれば見せてください。その力とやらを」

「はあ…なんでこんなから俺が生まれたのか。つくづく…イラつくぜ…！」

「なツ…！！」

突如魔力が上昇。それは僕の数倍にもなるほどに…しかし魔力からは禍々しさが感じ取れる。
これは…

「僕の憎しみ…？」

「はっは…！やっとな気付いたのか？俺には“これ”がある。貴様は俺には勝てねえよ。絶対に…な…！」

スperlカード、

『魔炎 サラマンダー』

蒼空の周りに複数の炎が現れる。

「く…（炎符ですか…しかも僕のより威力が数段高いみたいですね）仕方ないですねこれは魔力の消費が激しいからあまり使いたく

ないのですが…

『無符 無効化』」

周りの炎は一瞬にして消え去る。

しかし引き換えに魔力を大幅に消費してしまった。

しかし…璃空お兄さん（さすがにあの容姿でおじさんとは言えないので）は何で無効化を連発出来たのでしょうか…僕のはかなり燃費が悪いのですが。

まあ単に魔力の最大値が格段に違うというのもあるんでしょうけれど。

ちなみにそこらの妖怪が1とすれば僕は100。璃空お兄さんは1000といっても過言ではないくらいですね。いや、あくまで僕の予想ですが…

「さて…余談はいいとして、どうしましょうか」

「確かにこのままじゃきりがねえな。長引くのは嫌いだね、もう終わらすとするか。」

『悪符 天照』」

先程の炎とか違いドス黒い炎が現れる。

…多分直撃したら一瞬にして灰と化すでしょうね。

「悪符ですか…（僕にはない力を使えるというのはさすがに不利で

すね)しかし…無効してしまえばどんなスペルカードだろうと無意味ですよ。

『無符 無効化』

……………え？」

無効化が…

出来ない…？

「くくく…カウンターだ。ばか正直に無効化を連発すりゃあいいつてわけじゃないぞ？相棒。そのまま死ね」

無効化を無効化により相殺され、無効化が出来なくなってしまった。

そしてドス黒い炎が此方に飛んでくる。

「く…(無効化は無意味…避けるしかありませんね)」

距離を無にし、もう一人の自分の背後へと回り込み防戦から攻撃へと試みるが…

「ばかめ。あれは囷だ」

「ッ!？」

脇腹に激痛が走る。

それが蹴りだと気付くのに時間はかからなかった。

「痛ッ…」

あまりの激痛に立つことも儘ならない。
脇腹を抑え前を見ると…

笑っていた。

あまりの力の差におかしいのかももう一人の自分は笑っていた。

「この力…素晴らしい…感謝するぜ相棒。これでお前の体を手に入れ、人里を…潰す!!」

…人里を潰す？

そんなことはさせない。

確かに僕は人里の皆を恨んでいました。しかしそれはもう昔のこと…僕はお母さんや璃空お兄さん、そして幻想郷の皆が愛している人里を…そして幻想郷の一部を壊させやしない。

こんな力に溺れた奴には負けれない…絶対に負けない!!

突然力が湧き出る。

それは蒼空自身が光輝くほどのとても膨大な力だった。

「な…なんだよそれ…俺にはそんな力は…」

「当たり前ですよ。あなたにはあるわけがないです。これは想いで
すから。僕の大切な人を守る力です。人は皆大切な者を守るとき…
強くなれるのですよ。その想いが強ければ強いほど…ね」

「ふざけるな…そんな力は認めないぞ！くたばれこのや…」

反撃される前に光輝く聖なる剣で切りつける。

「力に溺れ、負の塊であるもう一人の僕：僕の思い出の中でじっと
していて」

「ぐ…ふ…ふはははは。俺は思い出にはならないさ」

一言言い残すと少しずつ消えていった。

「ふう…なんとかかなりましたね」

「坊やお疲れ。怪我は大丈夫かい？」

「大丈夫です。能力で無効化したので」

「…僕より強い（こんなチートなのに僕はいたずらを…汗）」

「そんなことはないですよ？僕は確かに能力はチートかもしれませんが
んが魔力はまだまだですし、戦闘の知識もありませんからね」

まあ能力で上げれば問題はないのですがね。

「さて…そろそろ僕を元の世界へ戻してもらいましょうか」

「もっとゆっくりしていく気はないのかい？ここで少し茶でもして
いけばいいじゃないか」

「折角のお誘いですが僕には仕事がありますし、何より皆が心配していそうなので…」

「そうだねえ。坊やには帰る場所があるんだもんねえ。まあお話はまたの機会としようか」

「…？またのって…華音さんはここから抜けることは出来ないのでは？」

「一応王女的な感じだとは思っていますが…」

「いやあ私は別にどこでも行けるのさ。気紛れで人間界や仙人界、そして坊やの故郷の幻想郷にも行ったりしているんだよ？」

「…ふえ？」

「華音さんが幻想郷へ…？」

「今まで見掛けたことがなかったのですが…」

「ああーそりゃあそうさ。私は気紛れで遊びに行ってるだけだし、誰にも姿は見せていないよ。あ…いや、八雲紫とは面識があったかな？」

「そ、そうだったんですか。じゃあ今度紅魔館へ遊びに来てください。お待ちしています」

「ありがとう坊や。その時はテンや志音も連れていくよ」

「皆さんでどうぞ。レミリアお嬢様には僕から言っときますので」

「…僕のこと許してくれるの？」

「今回は許します。しかし次回同じことがあれば遠慮なく潰しますので肝に命じておけ」

ニッコリ。

最高の笑顔で答えてあげました。

そりゃあもう優しく。

と…っても優しく言っただけましたよ…うふふ

「…は、はい！！（怖ッ！！やっぱりこの人怖い！！汗）」

「さて…雑談もいいのですがそろそろ僕は帰ります。準備の方をお願いできますか？」

「準備も何もすぐ出来るさ。私はこれでもこの世界のトップだからねえ」

「そうですね。…あ、戻る前にお願い事が複数あるのですがよろしいでしょうか？」

「ん？何だい？坊やには迷惑をかけちゃったからねえ。何でも叶えてあげるよ」

「そうですね。それはありがたいですね。実は……」あれから僕は元の世界へ戻ることが出来ました。

いきなり訳のわからない場所へ連れてこられかなりめんどいこととなってしまうが…

決して悪いことばかりではありませんでした。

りんさんとの出会い、トップに君臨する華音さん、華音さんの妹の志音さん、いたずらっ子のテンにも会えましたし、何より自分の中の奥底に眠っていた負の塊が消え、すっきりした気がします。

いたずら大好きテンが僕をここに連れてこなければ僕は素敵な出逢いもありませんでしたし、憎いという気持ちもいつかは爆発していたかもしれない。

そのようなことになれば僕は悪の自分に完全にのまれてしまい人里を…いえ、幻想郷を無茶苦茶にしていたかもしれない。

今回のことは悪夢でも何でもなく、僕への試練だったと思います。

結果的に僕はテンにあの世界に連れてこられて良かったと思います。た。（最初は迷惑だと思いましたが…）

まあまあ…！

今回のことは良しとしましょう！

さて…

お掃除をしなくては…

…あれ？

モップどこだったけry

悪夢 その伍（後書き）

今回一部にFF7の名言をもらいました。
なんか無理やり合わせた感じですが

FF7のDVDが好きなもので…ウフフ

さてさて、

明後日大会なので更新は大会終わって…
来週以内にはとは考えています。

今回は練習で内容を短縮したり、
流れで華音との戦いがなくなったりと…

申し訳ございません。

もしもその戦いが見たかった人がいればコメントを頂きたいと思
います。

それによって実現させます！！

華音、志音、テンはオリキャラです。

故郷（前書き）

遅くなりました。
申し訳ございません…

故郷

あの出来事から一週間。

普段通りの生活に戻り、今日は紅魔館の仕事は休みをもらいました。咲夜さん、レミリアお嬢様に徐々に人里へ訪れてみては？と言われましたので人里へ足を運ぶことにしました。

そして今僕はというと…

人里の目の前にいます。

「さすがに少し戸惑いますね…」

今はもう悪く思っている方はいないとわかっていてもやはりあれは僕のトラウマ…
そう簡単にはい、行け！と言われてもなかなか行けるものではないです。

足が進まない中、
懐かしい声の主が僕に話しかけてきた。

「久しぶりですね。蒼空くん」

「阿求さん。お久しぶりです」

声の主は稗田阿求さん。この方は稗田家九代目にあたる方で僕のことを理解し、人里の皆の誤解を解いてくれた方です。

…しかし阿求さんが人里の外へ出てるとは珍しいですね。
明日は雪ですかね？

「…今何か言いましたか？」

あ、やべ…

顔に出てたかもしれませんね。

「いえ何も言ってますんよ。それよりどこかへ出掛けるのですか？」

「そうですね。あなたの懐かしい霊力を感じたので迎えに来たのですよ。やはりなかなか入りづらいと思っていましたので」

…全てお見通しですか。
さすがですね。

「バレていましたか。やはりあのトラウマはなかなか消えてくれなくて…（苦笑）」

「もう貴方を悪く思っている方はいませんよ。それより久々の故郷ですし、ゆっくりしていただくさい。…あ、もし時間があるのでしたら私の家に寄っていきませんか？少しお話もしたいですし」

「…そうですね。では、少しお邪魔します」

少し考えた後、

阿求さんの屋敷へと足を運び、お話することとなりました。

数分歩くと人里でも目立つ大きな屋敷が見えてきた。そう、ここが阿求さんの家です。

屋敷の中へと進み、
中へと案内された。

そしてお茶を持ってきてくれた阿求さんも僕の正面に座り少しお話をすることとなった。

「さて…これでゆっくりお話することが出来ますね」

「そうですね。それでお話とは一体何ですか？」

「最近文々。新聞を見たのですが、色々大変だったみたいですね。よければ教えてもらえますかね？」

「構いませんよ。実は…(略)」

(作者がダルいからって略したとかじゃないんだからね!!)

「…ということがあったのです」

「なるほど。しかしそれはテンという子には本当に感謝ですね」

「結果的に良かったですね。まあ本当に色々大変だったのですが、あの方も今は元気にやっているとと思いますし」

「あの方…?」

「あ、先程の話しに出てきたりんさんです」

「…りんさんが元気にやっつてるといっつのはどういっつことでしょうか？彼は確か罪を償い続けるためにあの世界にいるのでは？」

「そうなんですけど実は…」

実は最後に華音さんをお願いしていたんです。
最後に…

「坊や、お願いってのは何だい？」

「実は…僕のことではなくりんさんのことです」

「りん坊やのことかい？」

「はい。りんの罪を消しては頂けませんでしょうか？そして元の人間界へ戻してほしいんです」

「…私は構わないけど、それはりん坊やが望んでることじゃあない」
「それはわかっています。しかし今のままではりんが苦しむだけです。僕はりんさんに罪を償うだけの人生を歩んでほしくないんです。りんさんはただ愛する者のためにしただけです」

「わかっているよ。しかしそれはりん坊やがやったことであって蒼空坊やがやったことじゃあない。なのに何でそこまでりん坊やを…他人を心配するんだい？」

「…僕は色んな方に救われました。色んな方の支えがあつたから今の僕がいるんです。だからこそ…僕は人の役に立ちたい。困っている方を見捨てるようなことは僕には出来ません。りんさんが望んでいないこともわかっています。もしかしたら迷惑だと思われるかもしれないません。しかし…それでも今のままではりんさんは救われません。僕はりんさんにもっと違う人生を歩んでほしいんです…」

これが僕の願い。

りんさんが愛した人はもういない…それは事実です。しかしだからといってここでずっとこうしては愛した方も望んではいけません。

そんなりんさんを放っておけるわけがないです。

「…わかったよ。蒼空坊やがそこまで言うんだったらその願いを叶えてあげるよ」

「本当ですか！？ありがとうございます」

「元はといえば私たちが悪いからねえ。このくらいはさせてもらわないとね。しかし…私かも一つ頼んでもいいかい？」

「何ですか？」

華音さんの頼み事ってなんでしょうか…？

まあただでやっってもらおうわけにもいかないですからね。

僕に出来ることならば何でもしましょう。

「蒼空坊やの魔力を少し食べさせてもらってもいいかい？極上のその魔力…一度食べてみたくてねえ」

ジユルツ…

「ふえ？ま、魔力ですか…？か、構いませんよ？」

ジユルツ

つてなんですか…？汗

なんか物凄く怖いんですが…

「本当かい！？いやぁ最近魔力を吸ってなかったからねえ。もう食べちゃいたいくらいだよ！あはは」

た、食べちゃいたって…まぁ殺されはしないでですよ…？
つてか、この寒気はなんでしょう…

「…僕大丈夫かなあ」

「大丈夫だよ。華音はそんな悪魔じゃないからね」

「おや？テン。いたんですか？」

「…ずっとここにいたよ。少し魔力を吸われるくらいだから大丈夫だよ（多分…）」

「なんか不安です…」

そのまま僕は微量の魔力と引き換えにりんさんを人間界へ戻すこと

ができました。

りんさんは少々戸惑いもあったみたいですが、僕の気持ちが伝わったのか快く受け入れてくれました。これからりんさんは幸せになっ
て頂ければ良いですね。

「…と、いうことがあったんですよ」

少々長くなりましたがこれが最後にあったことです。今頃りんさんは幸せに暮らしているんでしょうか？

「なるほど。蒼空くんは優しい方ですね」

「いえ、僕は優しくありませんよ。僕にしてくれたように僕も同じようにしているだけですから」

「そうですね。（あの蒼空くんが…ふふ、かなり大きく見えますね。もうあの頃の蒼空くんではないみたいです）」

「あッ…そろそろ僕実家へ戻ってみますね。久々の家はやはり懐かしくって…」（色々ありましたが僕の家には変わりはないですからね）

「おや、時間が過ぎるのは早いものですね。ではまた遊びにいらしてください。蒼空くんなら歓迎しますよ」

「ありがとうございます。では失礼しますね」

此方に笑顔で手を振る阿求に背を向け自分の家へと足を運ぶ。

あ…：そついえは華音さんや志音さん、テンは何をしているのでしょ
うか？

まあいずれ会うことが出来るでしょう。

さて…：僕の家はこっちですね。

故郷（後書き）

いやぁ今回は戦闘もなく、なんかほのぼのとしましたね。

あとは蒼空がどのくらい成長出来たかを伝えたいと思い今回は里帰りにしました。

次回は何年振りかの実家に戻ります。

何があるかはまあ楽しみにってことですね。

あ、

また個人的なことを言いますが、

わたくしは美容の大会（東北大会）にて優秀賞を受賞しました。なので11月に行われる全国大会に向けてさらに練習があるため更新がorz

いやぁカットは難しいですね。

どなたかわたしと同じように美容師を目指している方はいるのでしょうか？

あ、かなり個人的なことで申し訳ございませんでした。

では、

次回！！

『再会！？』

を、

お楽しみ～（^^）ノ

再会！？（前書き）

今回は原点に戻ってみました。

再会！？

阿求さんの家から数分、懐かしい自分の家が見えました。

…うん。

やはり誰も住んでいないと古いてしまえますね。

さて…

久々の我が家を拝け…

……

……

……

ハッ！？

いや、

気のせいです。

僕は何も見っていません。

つてか、

ここは僕の家ですね？

いや、

何故？

何故あなたが此処に…？

「華音さん…何故ここにいらっしゃるんですか？」

開けて吃驚。

自分の家のようにイスに腰掛け茶を飲みながら寛いでる華音さん…

何故？

「おや？ やつと帰ってきたのかい？ 全く… 悪魔を待たせるんじゃないよ坊や」

「… 華音さん」

「ん？ なんだい？」

「… 一つ聞いてもいいでしょうか？」

「だからなんだい？」

「… 何故僕の家にいるんですか？」

「暇だったから遊びに来たんじゃないか！ あはは」

… さいですか

懐かしい家で一人思い出に浸る時間も僕にはないみたいですね…

そして…

「何故魔理沙さんがここへ？」

「久しぶりだな蒼空。ちょうど空を飛んでいたら華音に会ったんだぜ。それで話してみたら意気投合したから蒼空の実家に行ってみよ

うという事で一緒に来たんだぜ」

…なんですか。この二人の意気投合さは…

「…そうですね。それで僕に思い出に浸る時間は…」

「…ないよ(ぜ)」

「…ですよね」

なんで僕ばかりいつもこうなんだーツツツ！！

とりあえず叫びました。

はい。そりゃあ叫びたくなりますよね。

うん。

「うるさいんだぜ。全く…人の家でのマナーがなってないぜ」

やれやれという素振りを見せる魔理沙。

「…ここは僕の家ですか？」

「あ…お茶がなくなった。お茶いれてくれるかい？」

…はあ。

こんなことならば紅魔館で仕事していた方がよっぽど良かったですよ。

「私もお茶をもらおうかしら」

突然スキマが開き、上半身だけを現す紫。

「お？八雲紫じゃないか。久しぶりねえ」

「華音が幻想郷に来るのも久しいわね」

「ん？なんだ。二人とも知り合いだったのか？」

「一度殺し合いをしてから仲良くなったのさ」

「まあ決着は着かなかったけどね」

あの大妖怪である紫さんと五分張るほどの実力を持っているのですか…

やはり華音さんはかなりの実力者みたいですね。

「はい、お茶です。それで紫さんは何故僕の家？」

「あら、ありがとう。…焙じ茶ね。美味しいわ。ちょっと面白いことがあったのよ」

一口啜り、何か胡散臭さを醸し出す紫さん…
直感で良からぬことだと察する。

「…それは僕にデメリットでしかないことでしょうか？」

「それは分からないわ。でも…拒否権はないわよ？」

「強制ですか…」

はあ…

もう厄介事には慣れているとはいえ、やはり嫌なものは嫌です。

「まあ気にしてても仕方ないですね。それで一体何をすればいいのですか？」

「詳しいことは言わないわ。…そうね。魔理沙！あなたも行きなさい」

「私は忙しいから無理だぜ」

「あら、こんなところに魔法のtr「やっば行くぜ！！」「ふふふ、じやあ決まりね。まあせめて満喫してきなさい。レミリアには私から言っておくわ」

魔理沙さん単純すぎです…ってか、馬鹿ですか？

それより満喫とは一体…

まあ今回は魔理沙さんもいますし何とかなるでしょう。

「それではスキマツアー二名様ご案内」

「蒼空坊や頑張るんだよw」

「ちょッ…」

突然真下にスキマが現れなす続べなく落下してしまった…

ああ…もっとうにでもなっちゃえ…orz

「…ら。そ……ら」

…ふえ？

らそつて何ですか…？

食べ物ですかね？

美味しいの？

「蒼空！！」

「ッ！？あ…魔理沙…さん？」

どうやら少し気絶していた見たいですね。

ここは…幻想郷？

しかし僕の知る幻想郷ではなさそうですね。

つまり…

「ここは過去の幻想郷？」

「お？寝起きにしちゃあ察しがいいな。どうやらそのようです。し

かし…何でまた過去の幻想郷に？」

するとそれをはかつてか突然スキマが開き、お決まりのあの方が現れた。

「蒼空に少し幻想郷に着いて知ってほしかったのよ。あ、ちなみにいつどこに飛ばすかは私の気まぐれだからいきなり飛んでも気にしちゃだめよ？」

…それ僕に勉強させるかどうかの前に紫さんがただ楽しんでるだけじゃ…

「おいおい…何で私が紫の娯楽に付き合わなきゃいけないんだ？」

「過去を知っている者が一人でも一緒にいた方が蒼空もいいでしょう？まあ言わばあの場にいた魔理沙は巻き沿いなただけけど」

「はあ…まあ貴重な魔法書ももらったことだし少しくらいはいいか。じゃあとりあえずいろいろ見て回るとするぜ！蒼空！行くぜ？」

「わかりました」

「“幻想郷”を楽しんでねえ」

とても胡散臭さい紫さんを置いてとりあえず魔理沙さんの後ろを着いていくことにしました。

配置は変わらずとも過去を知らない僕より魔理沙さんの方が案内は的確でしょうしこのまま着いていくことにしましょう。

しかし…この方向は博麗神社ですかね？

「着いたぜ」

「ここって博麗神社ですよね？」

「その通りだぜ。まあこの頃だと…“紅魔館”の異変が起きる頃だろつからとりあえず霊夢に会いに来たんだが…お、いたいた。霊夢
—！—！」

「魔理沙。今日はどうしたの？」

「そろそろ紅魔館の異変が起きる頃だと思ってな」

「はあ？何を言ってるの？」

「まあ気にするな。とりあえず今日は泊まらせてもらっぜ。ついでにこいつも」

「誰よその子…まさか…魔理沙拐ってきたんじゃないでしょうね？」

「なんでそうなるんだ！」

「だってどう考えてもそれ以外ありえないじゃない！」

「他にもたくさんあるだろう」

「…あの」

「「なんだ？（なによ）」」

「僕の知る霊夢さんではないってことですよね？」

「まあそうなるな」

「はあ？何を言ってるのよあなたたち」

「まあ必然的にそうなるな」

「ですよね」

「私に分かるように答えなさいよ」

「まあそうカリカリするな。と言っても信じちゃくれないだろうがな」

「そりゃあ誰だっていきなり言われれば疑いますよ」

「答えになってないわ。むしろわざとそう言ってるでしょ？」

あ、バレましたか。

「実はな…紫の娯楽で未来から来たんだ」

「…は？」

「ほらみる。信じないじゃないか」

「いきなりそれを言われて信じる方がどうかしてると思っけど？」

「そりゃあそうだな」

笑って見せる魔理沙さん。なんか楽しんでませんか？

「まあ立ち話で終わる話じゃないでしょうし中でじっくり話を聞くとするわ」

少女 & amp · 少年移動中…

「…で、詳しいことを教えてもらえるかしら？」

「実は…（省略）…というわけなんだ」

…妥協ですが何か？w

「…まあだいたいはわかったわ。それに魔理沙の魔力もこっちの魔理沙とは違うし、雰囲気…は変わらないわね」

「…昔から魔理沙さんはこうだったんですね」

「おいおい。ふたりして私をバカにするのか？それに人間がそう易々と変わるわけがないだろう？」

「それもそうね。まあ魔理沙の場合死ぬまでそのような気がするけど」

「確かに」

「それは言ってるな」

三人して笑う。

やはりこのお二人といると楽しいですね。

「…さて、魔理沙の言う通り明日異変が起きるなら今日はもう寝たらどう？…蒼空だっけ？少し疲れているみたいだし早めに寝て明日に備えなさい」

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えて寝るとしますよ…あれ？魔理沙さん、霊夢さんは寝ないんですか？」

「私は少し懐かしい霊夢と酒でも飲みながら話してから寝るとするぜ。蒼空は先に寝ているといい」

「そうね。少し未来のことも聞きたいし先に寝てていいわよ」

「わかりました。ではお休みなさい」

そういつて別の部屋へ移動し、棺桶を具現化し中に入り寝ることにしました。

ああ…やはりこのフィット感が堪りませんね…ウッフ

早朝、

いつもなら起きるはずのない時間に突然目が覚めてしまった。

ギィィィ…

棺桶を開き周りを見渡しても二人の姿はなく、外は暗…くないです。

何故か紅いです。

え？

火事！？

そう思い慌てて外へ飛び出すと…

「紅い…霧？」

周囲は紅い霧で覆われ、朝方だというのに日差しもなく、鳥の囀りもない。そして夏だというのに肌寒い…

「これは一体…あ」

そういえば昨日魔理沙さんが異変が起きるとかどうとか言っていたね。

「確か紅魔館での異変だったような…」

過去の幻想郷での異変…

気になりますね。

少し散歩がてら行ってみることにしましょう。

まだお二人も寝ていることですし…

博麗神社から紅魔館は確か…こっちですかね？

やはり誰だって過去のことには少しは興味を持つでしょう。

そんな蒼空は朝方にも関わらず紅い霧の中紅魔館へ行くことにした。

再会！？（後書き）

原作通りとまではいきませんが、
わたし自身初心に戻ることも兼ねて
今回は過去へと戻り、
異変を解決していく…のか？

まあまあ、

どうなるかはわたしだけが知ることです。
結果が皆さんにとって受けの良いものになるかわかりませんが…
頑張ります。

過去の紅魔館（前書き）

注：原作と違う部分が多々あります。

過去の紅魔館

博麗神社から紅魔館へと向かう途中、ルーミア、チルノなどに絡まれましたがその度に撃墜。チルノはやはり？でしたね。つてか、

学習能力というものがないんですかね？

あまり魔力も消費することもなく紅魔館へと着きましたが…過去でも中国さんは寝ているんですね。

全くもって変わっていない。中国さんもチルノと同様？としておきましよう。

さて…仕事（門番）をサボっている中国さんには咲夜さんに変わって僕がお置きしておきましょう。

「『雷符 雷神の逆鱗』（弱）」

直後威力をある程度抑えた雷撃が中国を襲う。

寝ているため悲鳴をあげる暇もなくその場に倒れ込む。

まあ威力は抑えましたし、大丈夫でしょう。頑丈さなら幻想郷の中でもベスト3に入るであろう中国さんならきつと…ね。

「さて…過去の紅魔館の方々を早く説得して異変を解決してしまいましようか。さて…中へと入り」その必要はありませんわ」あ、咲夜さん」

屋敷の中へと入ろうとドアに手を伸ばそうとしたら背後から聞き覚えのあるこの屋敷のパツ…メイド長の咲夜さんが話しかけてきた。

「？何故私の名前を知っているのかしら？」

「それは…信じてくれなさそうなのでいいです。それよりこの異変は紅魔館の方々が起こしたんですよね？」

「何かあるみたいね。君の言う通り異変を起こしたのは私たちで当たりだわ。とりあえず中で話しましょう。中で詳しく話を聞きますわ」

「そうですね。僕も出来れば紅魔館の方々とは戦いたくないので話し合いで解決したいですね。あ、中国さんはサボっていましたので咲夜さんが変わってお仕置きしておきました」

「ふふふ。面白い子ね。さ、中へと入りなさい。案内しますわ」

「わかりました」

中へと入り、お嬢様への場所へ案内される。

屋敷内は…それほど変わってはなないみたいですね。

「お嬢様。失礼します」

「入りなさい」

ギィィィ

屋敷の中でも一際大きいドアを開くと僕の知っているレミリアお嬢様より若干幼さが残るレミリアお嬢様がいました。

「我が屋敷へとよく来た人間。さて…人間、話をしてもらおうか」

うわぁー人間って呼ばれてるー。
しかもやたらカリスマ性を醸し出していますし…
もっと素を出せばいいのに。

「確かに僕は人間ですが、人間って名前ではありませんよ？僕の名前は神風蒼空です。それと…失礼ですがそこまでカリスマ性を出さなくてもいいと思いますよ？もっと素でいた方が僕はいいと思います」

「ッ！？なッ…わ、私はこれが素だ！咲夜！！その人間を今すぐ殺しなさい！！」

「…わかりました。蒼空と言ったわね？悪いけど、消えてもらおう」
「いえ…わたしは紅魔館の方々と戦う気はないと言いましたよね？」

ニコツと笑ってみせる。

「！？う、動けない…？」

「咲夜！何をしてるの！」

「無理ですよ。咲夜さんは一歩足りとも動けないようにしましたから。少しは僕の話聞いてもらえませんか？」

「お嬢様…」

「…わかった。話を聞くから咲夜を離しなさい」

「わかりました。咲夜さん…大丈夫でしたか？」

「ええ大丈夫よ。（しかし…この子の能力は一体）」

「どうやら咲夜さんは僕と戦う気はなさそうですね。」

しかしレミリアお嬢様はやはり不機嫌のようですね…苦笑

「さて人間「蒼空です」…蒼空。話を聞かせてもらおうじゃない」

…あ、少しずつ口調も戻ってきた。

「まず僕は…（略…と、言うわけなんですが分かりましたか？」

（過去へと来た理由が分からない方は一話前をお読みになってください）

「なるほど…それで蒼空は私たちが起こした異変を解決するべく紅魔館へ来たわけね」

「その通りです」

「だがしかし断る…！」

「え…？」

「太陽の光は吸血鬼には毒でしかないわ。それを遮断するために紅い霧を使用したのにそれを1日も満たないのに解除するだなんてできないわ」

「…はあ（予想はしていましたがやはりそう易々とは引き下がりませんか…）レミリアお嬢様が太陽の光に弱いのは知っていますよ。」

しかしいつもみたいに日傘を使用すればいいのではないのでしょうか？」

「（お嬢様？それに日傘をしていることは言っていないはずだけど…）それでも嫌よ」

「いえ、そこは分かってくください。この霧を何とかして頂けないと幻想郷の方々が困ってしまいます」

「そんなこと知らないわ」

「このままでは霊夢さんや魔理沙さんが来てやられますよ？」

「ふふ…人間ごときに誇り高い吸血鬼が負けるはずがないわ」

「いやいや、僕は未来から来てるので結末を知っていますので（昨日少し魔理沙さんから聞いたくらいだけど）」

「そんな運命私の力で変えてやるわ」

「だからそれが運命なんですって」

（会話が無限ループのため以下略）

「はあはあ…なかなか折れませんか…」

過去でもわがままさは健在ですか…

ガチ厄介…orz

「蒼空こそ早く折れなさいよ…（いい加減疲れたわ…）」

するとずっと黙っていた咲夜さんが口を開いた。

「このままでは決まりかねないので勝負して決めてはどうでしょうか？」

「それだわ（です）！！」

…何この二人のハモリ具合。

まあ私は正直どちらでも構わないのですがね。

「さて…蒼空、覚悟はいいかしら？」

「レミリアお嬢様こそ（あまり気が進みませんがこの際少しくらいお仕置が必要でしょう）」

「ふん、その余裕はいつまで持つのかしら？」天罰 スターオブダビデ『！』

…天罰ですか。

これは確か網目状のレーザーで六芒星をイメージしたスペルカード。何度か見たことはあるため能力を使わず避けれるでしょう。

レミリアの弾幕は蒼空に当たることなく壁に激突…せず、何か結界のようなものに当たり消滅した。

「ッ！？」

「あ、屋敷が壊れないようにしていただけですよ？気にしないでください」

さすがに屋敷を壊すのは不味いですしね。
まあ魔力2割程度持つていかれましたが…

「そんなことも出来るのね。でも魔力が減っているわよ？」

「心配は無用です。レミリアお嬢様を少しばかり懲らしめる程度…
問題ありません」

「ッ！！こんのおおお！！」神術 吸血鬼幻想『！！』

屋敷一面に弾幕が広がる。

あ、

やべ…少し怒らせてしまいましたか。

さすがに神術を能力なしで避けるのは厳しいですね…

「そろそろ僕も能力を使わせて頂きます。『雪符 白き女王モンブ
ラン』」

（皆さんご存知、アルプス最高峰の山を由来にしたスペルカードで
す）

屋敷一面に広がった弾幕は全て凍らせ、指を鳴らすと同時に碎け散
った。

周りには冬を思わせるような綺麗な氷の破片が散っていた。

「…綺麗ですね。何もかも忘れられるほどのこの美しさ。素晴らし
いとは思いませんか？」

「ふん、そんなことはどうでもいいわ！死になさい！！」神槍 ス
ピア・ザ・グングニル『！！』

グングニル…ですか。

確か神話に登場する伝説の槍でオーディンの所有物とされている。
何者もかわすことが出来ない最強の武器の一つ…でしたね。
あれはさすがにまずいですね。

「『無符 無効化』」

「なッ!？」

グングニルが放たれた瞬間それを消し去る。

何が起きたか理解出来ないレミリアだがそれは咲夜も同じだろう。

「僕の能力で無効化しました。何度やっても同じですよ？（はった
りですけどね）」

「ぐ…この私が人間ごときに負けるはずがない！！」紅色の幻「聞
き分けが悪いですね。『無符 無効化』、続いて『爆水 リヴァイ
アサン』「ッ！！」

レミリアが唱えたスペルカードは弾幕が現れる前に消滅。そして蒼

空のスペルカードにより巨大な津波がレミリアを襲いかかる。

「ぐ…」

巨大な津波に抵抗することも出来ずそのままのまれる。

ちなみに僕は咲夜さんを連れて天井付近で回避。

…室内で使用するものではないですね。

「お嬢様！！蒼空離しなさい！このままではお嬢様が…」

「心配はいりませんよ。全て『無』にしますので」

「それはどういつ…ッ!？」

「ほらね」

波は消え、

倒れているレミリアが確認出来る。

勿論ダメージも消してあるため何も問題はありません。

「お嬢様！大丈夫ですか!？」

直ぐ様レミリアの元へ駆け寄る咲夜。

「う…咲…夜？」

「良かった…お怪我はありませんか？」

「ダメージも消してあるので大丈夫ですよ」

「だと良いのですが…」

「さて、僕の勝ちですので早くこの霧を何とかして」レミリア!!
退治しにきたぜ!」あ…霊夢さん、魔理沙さん」

ドアをマスタースパークで破壊し中へと入ってきた魔理沙さん。
…普通に入ってきてくださいよ。

「ん? 蒼空が何故ここにいるんだ?」

「お二人より早めに目が覚めましたので僕が異変を解決しようかと思
いまして。あ、ちなみにもう解決しましたよ?」

「何ですって!? せっかく暴れると思ったのに…」

…それはまた違うと思うのですが…

「まあとりあえず…レミリアお嬢様。早いところこの異h…ってあれ
?」

何この浮遊感。

真下を見るとそこにはスキマが…

「うわあああ!」

「またかあああ!」

「「ッ！？」」」

突然のスキマにより消えた蒼空と魔理沙に驚きを隠せない霊夢、レミリア、咲夜の三人。

まあ一応解決しましたし…

いいかな？

次はどこに飛ばされるのかなあ…

これにて異変解決？

過去の紅魔館（後書き）

遅れました。

しかし今回もなかなかひどいですね…

文才がほしい今日この頃…

あ、

少しずつ蒼空も最強になってきましたね。（苦笑）

果たしてこれでいいのだろうか…

真実とは時に残酷なもの(前書き)

更新遅れました。

原作破壊しまくってます。すみません…

真実とは時に残酷なもの

過去の幻想郷へ送られ、紅魔館での異変を解決した僕は再び紫さんのスキマによりどこかに飛ばされたのですが…
ここは…？

いえ、

誰がどうみても森です。

しかしこのような森は幻想郷で見ただことがありません。

「魔理沙さん…ここはどこですか？」

すかさず隣で僕と同じような顔をしている魔理沙さんに聞いてみる
が…

「いや…過去にこんな場所はないぜ。というかここは本当に幻想郷
なのか…？」

やはりわからないようです。

しかし過去ではなさそうです。

だとしたら一体ここは…

一人考え事をしていると、茂みから何者かの気配がする。

「ひッ…」

「…妖怪？」

どうやら妖怪のようですね。しかし子連れとは珍しい。

しかし何故こんなに怖がっているのでしょうか…？

「何でそんなに怖がって「来ないで！！殺すなら私だけにして！！この子だけは…この子だけは助けて！」…はい？」

一体何がどうなってるんでしょうか。

「あの…とりあえず落ち着きましょう？僕たちは襲いませんし、まず殺気も何も感じないでしょう？」

「そうだけ。いきなり見て殺すなはさすがに酷いぜ」

「…あ、あなたたちは私たち妖怪を殺さないのですか…？」

二人して顔を見合せ何がどうなっているのか全く検討がつかない。

とりあえず落ち着かせ話を聞くことにすると…

それは何とも信じがたいことだった…これは僕の推測と話を聞いたことを交えて説明します。どうやらここは僕たちがいた幻想郷から未来のようです。何年後か…はたまた何百、何千年後かはわかりません。

未来は人間が幻想郷を支配しているらしいのです。幻想郷は妖怪などと共存していく場所であると聞いたことがあります。しかしそれがなくなり、人間は自分たちの縄張りを少しずつ増やしていき、妖怪共を徐々に抹消…そして何より一番驚いたのがその人間のリーダーであるのが…

あの“博麗霊夢”だった。これは僕の推測に過ぎませんが、彼女は少しずつ妖怪を退治ではなく殺していったのでしよう。いえ、僕自身信じ難いことですが…

一体何がどうなっているのが混乱してしまいます…
そして何より、
紫さんは僕たちに一体何を教えたいというのでしょうか…

「これが未来の幻想郷。私自身ももうこの幻想郷にはいないわ。あの霊夢によつて…ね」

「ゆ、紫さん！？…し、しかしあの霊夢さんがそんなことをするのは思えませんが…」

「あの子は歴代の中でもずば抜けて強力な力を秘めていたわ。そして私はいずれこうなることを予知していたけど…まさかこんなに早くだなんて。もっと後の世代だと思っていたけど…」

…ん？

待つてください。

何故未来のことを知っているのでしょうか？

「…それはちよくちよく未来の“私”と話をしていたからよ」

…なるほど。

境界をいじれば出来ますもんね。

でもやはり…

信じられません。あの霊夢さんがそんなことをするはずがありませんよ。

「いや、待て。仮にそうだとしたら私はどうなったんだ？」

「魔理沙は妖怪の味方になり、止めようとして死んだわ」

「…マジかよ」

「仲間である魔理沙さんまで…一体霊夢さんに何が…」

「ッ！？いけない！！あの子が来るわ！！とりあえず逃げるわよ！！」

「「え？」」

一瞬にしてスキマ送りになる。

もちろんあの妖怪の親子も。

「ここなら大丈夫でしょう」

どうやら先ほどの場所から離れたみたいですね。やはりここがどこなのかわかりませんが…

「それで、僕たちを未来に連れてきてどうしろと言うのですか？運命は変えられない…いえ、それを変えるために未来へ飛ばした…ということでしょうか？」

「察しがいいわね。その通りよ」

「でもやはりあの霊夢がこんなことをするだなんて信じ難いぜ」

「これは真実よ。真実とは時に残酷なもの…そうでしょ？」

紫の一言で黙り込む魔理沙。
そんな中僕は口を開いた。

「紫さん。具体的にどうすれば未来を変えられるのですか？」

「それは…」「こんなところにいたの？逃げるだなんてあなたらしくないじゃない」「ッ！！」

もうここを嗅ぎ付けるだなんて…

しかし…僕たちが知っている霊夢さんではない気がするのは気のせいでしょうか…？

「…この子は私たちの霊夢から三代後の霊夢よ。この子もまた強力な力を秘めているわ。気を付けなさい」

「ふふふ。お褒めの言葉ありがとう紫。またこの手で紫を殺せるだなんてね」

「紫さん…」

「どうしたの？蒼空」

「この場は僕に任せてもらえませんか？」

「な、何を言うの！？あの子は私たち三人で戦っても勝てるかどうかわからないのよ！？それを一人で相手するだなん「大丈夫です。それより紫さんはその妖怪の親子と魔理沙さんをどこか安全な所へ」…わかったわ」

この場には多分…巻き沿いになり死んでしまうでしょう…
この霊夢さんを相手に周りを気にして戦ってる余裕はありませんからね。

「いや、私は残るぜ」

「え？」

蒼空と紫は揃えて声を発した。

「私のことは大丈夫だ。自分の身くらい自分で守るから私も残らせてくれ。霊夢と話がしたいんだ」

「…分かりました。では、紫さん行ってください」

「私がそう易々と逃がすことで何か問題でも？」…まあいいわ。(この蒼空って子…なかなか面白いじゃない)あなた先殺してあげるわ」

「いや、待て。私が先に相手になるぜ」

紫を無事逃がすことが出来た。

しかし魔理沙が先に相手になると言い出した。

「魔理沙さんここは僕が先に「いや、私に相手させてくれ」…分かりました」

何か強い思いがあるんですね。

「魔理沙が先？魔理沙は先代にとられちゃったからね。今度は私が

殺してあげるわ」

…ここまで変わっちゃったのかよ霊夢。

私を知る霊夢じゃないとしてもお前はこんなことをするような奴じゃないだろ？

「お前は私を知る霊夢じゃないがお前はこんなことをするような奴じゃないだろ？何でこんなことになっちゃまったんだ…」

「相手にならないで説教？馬鹿馬鹿しいわね。いずれ幻想郷は人間が支配する運命なのよ。それがこの時代だけじゃない」

「…これじゃ外の世界と何も変わらないじゃないか！霊夢…お前のしていることは間違ってる…！」

「…うるさいわね。さっさとその口を塞ぎなさい…！」

スペルカードの宣言もなしに霊夢の得意とする札を使った攻撃が魔理沙に襲い掛かる。

「スペルカードの宣言も無しかよ…（そしてこれは封魔陣か…？）」

「スペルカード？そんなものはもうとっくの昔に廃棄になってるわよ？あんな遊び半分の遊戯いらないわ」

「く…（私の知る霊夢より技の速さが全く違う…）『恋符 マスタースパーク』…！」

全ての弾幕を消し飛ばしたかのように思えたが…

「…嘘だろ？」

何一つ消え去ることはなく、それは魔理沙に向かって来た。

「魔理沙死になさい」

霊夢がそう一言発する。

窮地に追い込まれた魔理沙…

迫り来る弾幕に魔理沙は…

（私はこのまま死ぬのか…？私じゃ霊夢を救えないというのか…ふふ、私の最後まで呆気ないものだな…）

魔理沙はゆっくりと目を瞑った。

真実とは時に残酷なもの（後書き）

未来の幻想郷は絶望と言っても過言ではないでしょう。

そんな中蒼空と魔理沙は自分たちの未来を変えられるのか？

はたまた魔理沙の運命は…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4635/>

東方 ~ 忘れられた少年 ~

2011年7月27日22時34分発行